

整理番号

117

太地町地域プロジェクト改革計画書

地域プロジェクト名称	太地町地域プロジェクト		
地域プロジェクト 運 営 者	名 称	太地町漁業協同組合	
	代表者名	代表理事組合長 脊古輝人	
	住 所	和歌山県東牟婁郡太地町 太地3167-7	
計 画 策 定 年 月	平成28年5月	計画期間	平成29年度～34年度
実証事業の種類	改革型漁船等の収益性改善の実証事業		

1. 目的

太地町地域における定置網漁業は現在大型2ヶ統、小型1ヶ統が組合員の共同経営として営まれているが、本漁業は約100年前からの村張りの系譜を引いて、地域の経済と生活に大きく貢献してきた存在として評価されており、今日でもその運営において雇用と地域を支える重要な産業と位置づけられている。過去にはその収益によって中学校や駅を建設するなど地域の繁栄に重要な役割を果たしてきた。

しかしながら、近年では多発する台風や急潮対策としての網揚げによって操業機会を逸失しており、漁獲量が減少している。漁撈技術面においては、主対象魚種のブリが一度に大量入網することが多く、定置網内で魚体同士の摩擦を解消することができず、近年の魚価の低迷に拍車をかけている。流通面では仲買業者や販売経路の弱体化があり、衰退が際立っている。また、燃油や漁業資材の高騰といった、全国共通の問題も定置網の経営を圧迫している。

本改革計画では、安全性を十分に確保したうえで、作業の合理化・省力化を進めてコストの削減を図り、近代的な漁具・操業体系に改善する。漁獲物は、品質を落とさずに漁獲し、さらにそれを、一時加工や直販することで高付加価値化し、収益を確保する。これによって定置網漁場の運営を安定かつ永続的にし、地域経済を活性化することを目的とする。

2. 地域の概要

(1) 和歌山県の概要

和歌山県は紀伊半島西部に位置し、約650kmに及ぶ海岸線を有している。海域は紀伊水道内域を漁場とする瀬戸内海区と紀伊水道外域～熊野灘南部を漁場とする太平洋南区に分類され、内海性と外洋性の大きく異なる属性を持ち、それぞれ海域の特性に応じて各種漁業が営まれている。瀬戸内海区は、タチウオ・底魚類・エビ類などを対象とした小型底びき網漁業やイワシ類のシラス・イカ類を対象とした船びき網漁業の他に、アジ類・サバ類・マダイなどの一本釣り、底魚類・イセエビなどの刺網、アワビ類・サザエの採貝、ワカメ等の採藻、定置網等の多様な漁業が営まれている。

一方、太平洋南区は、沖合海域を流れる黒潮本流の離接岸に大きな影響を受けることが知られており、カツオやマグロ類等を対象としたひき縄やアジ類・サバ類・イワシ類を対象としたまき網を中心に、イセエビや磯魚の刺網、イサキ等の一本釣り、ブリ等回遊魚を狙った定置網、イワシ類未成魚の棒受網、マダイやクロマグロ等の養殖、ヒジキやヒロメ等の採藻、トコブシ等の採貝等、瀬戸内海区と同様に多様な漁業がみられる。

本県における定置網漁業は大型定置網が6経営体、小型定置網が20経営体あり、県内に広く分布し営まれており、先述したブリの他、アジ類・サバ類・サワラ・スルメイカ・タチウオ等、多様な魚種が水揚げされている。特にサワラは近年漁獲量が増加

傾向にあり、ブリに次ぐ主要な魚種になりつつある。平成25年度の水揚量は3,327 t、生産金額は約13,000百万円であり和歌山県全体の水揚げ量の約13.1%、水揚げ金額の約10%を占める。

(2) 太地町の概要

太地町は和歌山県南部、紀伊半島南東端に位置し、西は那智勝浦町に隣接し、北は森浦湾と勝浦港に面し、東南は熊野灘を臨む総面積 5.81 km²の町である。緑豊かな山と自然美あふれるリアス式海岸と美しい海に面し気候は温暖である。

人口は、昭和 35 年の国勢調査では 4,556 人であったが、平成 2 年には 4,098 人となり、平成 22 年には 3,250 人と大きく減少している。産業は、昭和 35 年～平成 22 年までの 45 年間で総就業人口の推移は、1,471 人から 1,354 人と減少している。その中でも基幹産業であった第一次産業の全体に占める人口比率が減少している。

太地町漁業協同組合の組合員数は 384 名（うち正組合員 150 名）で定置網、捕鯨、イセエビ刺し網、採貝漁、一本釣りなど多様な海面漁業が営まれている。特に捕鯨業は 400 年以上の歴史を有する「くじらのまち」として広く知られ、地域には鯨文化が色濃く残っている。

太地町は、観光事業にも力を入れ、昭和 44 年には「くじらの博物館」を建設し平成 18 年には「太地町くじらと自然公園のまちづくり構想」、またその具現化のための『森浦湾鯨の海構想』を策定した。これらの観光資源の活用とともに、地元で水揚げされる水産物を販売できる道の駅が平成 29 年 3 月に竣工の予定である。



(3) 太地町地域の定置網漁業の概要

太地町漁業協同組合の総水揚量 716t および総水揚高 324,763 千円（図 1）に占める定置網漁業の割合は、水揚量が 496t・69%、水揚高が 121,090 千円・37%（図 2）を占めており重要な漁業種類となっている。

太地定置網は周年で 3 ケ統の定置網を操業しており（4 ページ 図 3）、冬場から初夏にかけては A 漁場、夏場から初冬にかけては B 漁場・C 漁場の操業を行っている。漁獲される主な魚種は A 漁場ではサバ、ブリ、イカ、アジ等、B 漁場・C 漁場ではカマス、イワシ、アジ等雑魚となっている。A 漁場で漁獲されるブリは水揚高全体の 40%を占める重要な魚種となっている。

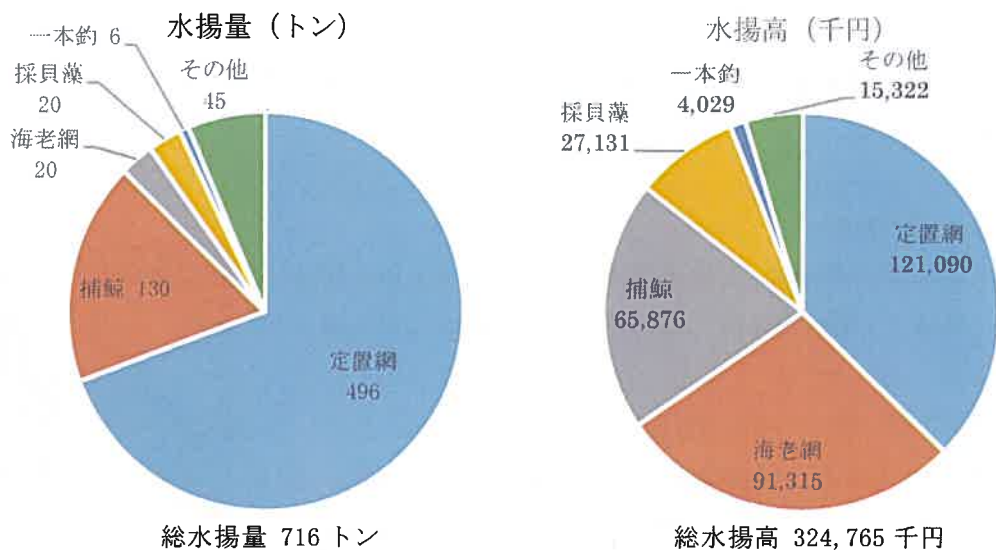


図1 太地町漁業協同組合における業種別水揚量および水揚高
(平成 24~26 年度の平均)

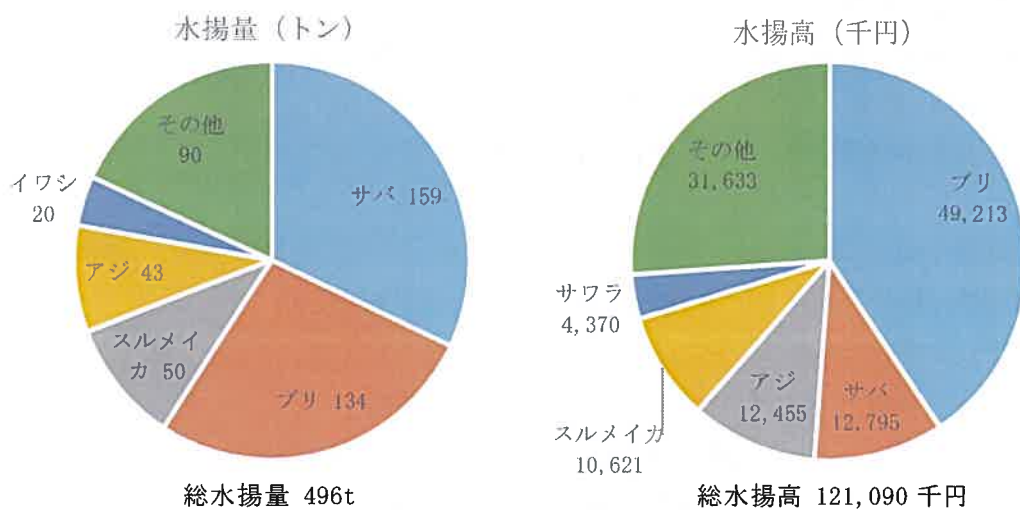


図2 定置網の水揚量および水揚高
(平成 24~26 年度の平均)

(4) 操業形態の現状と課題

① 使用漁船

太地定置網では本船1隻・台前船1隻・作業船2隻・網積み船1隻、計5隻の船団で大型定置網2ヶ統(A・B漁場)・小型定置網1ヶ統(C漁場)の計3カ統を操業している。そのうち網起しには本船と台前船を用い、沖作業は残りの3隻を加えた5隻で行っている。

現状の5隻による作業については積載力不足、漁撈機器の能力不足、操作性・作業性の難しさが課題となっている。特に操作性・作業性の問題から乗組員による潜水作業が余儀なくされており心身に大きな危険を伴っている。

② 乗組員

太地定置網の乗組員は現在 15 人となっている。乗組員の平均年齢は 45 歳であり、将来の若手乗組員確保が懸念されている。また現乗組員は他業種からの転職者が多いため、定置網操業の経験が不足しており網保守技術の継承が困難となっている。

③ 使用漁具

太地定置網で使用している漁具は潜水作業が前提となった仕様のものが多く、安全性・効率性が図られていないのが現状である。その他に

- ・潜水作業の負担から網交換回数が少ない。
 - ・A漁場の設置位置は来遊する魚群の遮断効率が悪い。
 - ・A漁場の肘金庫網はブリ類の大量入網時に容積を確保することが出来ない。
- などの課題が発生している。

④ 出荷・販売

太地定置網の漁獲物は太地町漁協に水揚げされ、大都市消費市場に出荷されているほか、一部は太地地区の朝市や漁協直営スーパー等に提供し、地域の消費者に地元漁獲物を販売している。

現状では古くから継続している販売経路のみに頼り、大量漁獲時の単価下落には漁業者が大漁貧乏となり、定置網の経営が安定しにくい状況である。販路の拡大・単価向上の対策は定置網の継続・発展に必須となっている。

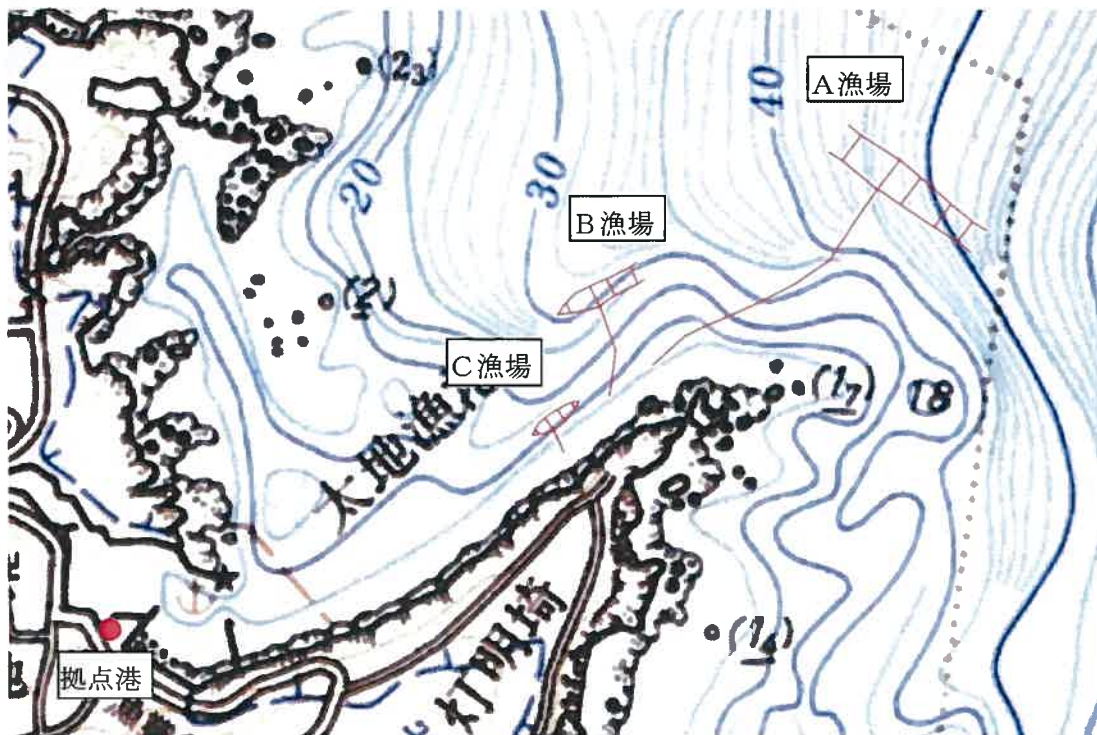


図3 太地定置の漁場図

3. 計画内容

(1) 参加者名簿

① 地域協議会

分野	所属機関・団体	役職	氏名
行政	和歌山県農林水産部 水産局 資源管理課	課長	市場 敏男
	和歌山県東牟婁振興局 農林水産振興課	課長	初山 守
	太地町	町長	三軒 一高
漁業団体	和歌山県定置漁業協会	会長	亀井 睦弘
	太地町漁業協同組合	代表理事組合長	脊古 輝人
漁業者	太地水産共同組合	理事長	岸野 知夫
		理事	長尾 節夫
流通・加工	南紀くろしお商工会	会長	森川 起安
	太地町	総務課 (道の駅担当)	和田 正希
	太地魚商組合	組合長	塩崎 伸一
金融	紀陽銀行	太地支店長	安田 敏
漁具	ホクモウ株式会社	漁労開発部 開発課	日下部 誠

アドバイザー

漁業者	太地水産共同組合	総務	宮川 雅紀
		乗組員	奥 光史
			岡 茂浩

2. 事務局員名簿

所属機関・団体	役職	氏名
太地町	総務課	山下 真一
太地町漁業協同組合	参事	貝 良文
	業務部長	谷 和豊

(2) 改革のコンセプト

太地定置網では操業面の安全性・作業性確保と販売面での販路弱体化が大きな課題となっており、操業面では現船団の能力不足や漁具の運用方法、定置網の宿命である漁場を容易に変更できない問題が挙げられる。また販売面では魚価の低迷、大量漁獲時に水揚げ調整が出来ないことが挙げられる

太地町において重要な基幹産業である定置網の課題を乗り越えるため、安全性の確保や省力化に寄与する大型の改革型漁船の導入および作業性の向上や効率化が図られた改革型漁具を導入し、定置網操業の安全性・作業性・出荷管理体制を確保する。

また乗組員の安定確保と技術継承を図るとともに、道の駅を利用して地域住民から観光客まで幅広く漁獲物を販売し、魚価の向上を図ることにより収益性を改善して、安定的に継続できる定置漁業経営体制を確立する。

<生産に関する事項>

① 安全性の確保

定置網操業（A・B・C漁場）における沖作業の際に行われている潜水作業を回避するため、小廻りの効く改革型作業船を導入する。

② 改革型漁船の導入

安全性・省力化を基本とする作業能力・積載能力に優れた改革型本船を導入する。省エネ機器及び省力用漁労機器を搭載し、省コスト化・省力化を図る。

A漁場・B漁場の台前船及びC漁場の網起し船として①の改革型作業船を活用する。合わせてC漁場の網起し方法を環巻き式に改革する。

③ 合理的な漁具及び分割箇所を変更した改革型漁具の導入（A漁場）

作業性の向上や網交換時間の短縮を図り、潜水作業を回避した沖作業や台風接近時など早急な網抜き作業に対応する。

④ 網交換サイクルの変更（A漁場）

網交換回数を増やし、漁具破損や漁獲量低下を防ぐ。

⑤ 網設置の効率化（A漁場）

箱網の沖側に道網を新設し、通過している魚群の誘導を図る。

⑥ 肘金庫網の増設（A漁場）

肘金庫網を増設することにより入網したブリ類の魚密度を下げ、「スレ」ブリの発生を抑える。

肘金庫網を利用して水揚げ調整を行い、ブリの価格維持を図る。

⑦ 資源管理の実施（A・B・C漁場）

年間連続20日以上の子業を行い資源保護に取り組む。

⑧ 乗組員の確保と育成

現在の年齢構成が40～50代に偏っており、10代からの若い世代の乗組員を確

保するため、体験実習や技術継承を図り、積極的な広報を行う。

<流通販売に関する事項>

① 出荷販売先の多様化

道の駅を活用して、販路を広げる。

② 魚価の向上

「スレ」ブリの販路を開拓し、魚価の向上を図る。

<乗組員の確保と育成（再掲）>

① 中学生、高校生の体験実習を受け入れる。

② 年齢構成等を配慮して乗組員採用を行う。

③ 定置網漁業者のOBによる技術指導を実施する。

<地域との連携に関する事項>

① 道の駅・朝市等のイベントに参加。

② 地元中学生が行うフィッシュバーガー販売に必要な食材の提供を通じて、地元水産物に対する認識向上を図る。

③ 漁獲物を太地町ふるさと納税の記念品として取り扱う。

(3) 改革の取組内容

大事項	中事項	現状と課題	取組記号・取組内容	見込まれる効果(数値)	備考
生産に関する項目	改革型漁船の導入	<p>○ 太地地区の定置網は大型2ヶ統(A・B漁場)、小型1ヶ統(C漁場)の3漁場を乗組員15名、5隻の船で操業管理している。</p> <p>○ 漁場での沖作業のとき、従来から乗組員が潜水し海中作業を余儀なくされ、安全性・作業負担、作業時間の長さなどが課題となっている。また作業負担の大きさから沖作業が滞ることもある。</p> <p>○ 現船団では漁撈機器の能力不足、甲板スペースの広さの制約から、網交換作業の効率化が難しく、乗組員の人数も必要となる。</p> <p>○ 現在の5隻操業では燃料費や修繕費の負担が大きい。</p>	<p><u>A 改革型漁船の導入</u></p> <p>A-1 ○ 小廻りの効く改革型作業船を導入し、潜水作業を伴わない定置網操業体制へと改革する。 (応用) 船・人</p> <p>○ 改革型作業船は網起し時にA漁場・B漁場の台前船として活用する他、C漁場の単船網起し船としても活用する。 (応用) 船</p> <p>A-2 ○ 大型網抜き機・クレーン2基を搭載した改革型本船を導入する。大型漁撈機器の装備により作業性の向上、省力化に寄与する。</p> <p>○ 後述の浮子付き漁具(取組B)や分割箇所を変更した網(取組C)を回収・積載することが可能となる。 (普及) 船</p> <p>○ 改革型作業船(A-1)と改革型本船(A-2)を導入し、従来船4隻を減船する。旧本船を網積み船とした3隻体制で操業する。改革型本船の省エネ装備として低燃費エンジン・低燃費プロペラ・バルバスバウを導入する。</p> <p>○ 改革型作業船の省エネ装備として低燃費エンジンを導入する。 (普及) 船</p>	<p>○ 潜水作業が廃止され、乗組員の安全性が確保される。 潜水回数40回/年⇒0回/年に削減。</p> <p>○ C漁場の網起し時間の短縮が図れる。 45分⇒25分に短縮。 C漁場の網起し人員が10人⇒6人となり、漁獲物の出荷時間が早まる。</p> <p>○ 作業性の向上、省力化が図れる。 乗組員 15人⇒14人 人件費 70,991千円⇒66,258千円4,733千円削減。</p> <p>○ 網交換作業の軽労働化が図られ、作業時間の短縮に寄与する。 A漁場の網交換総時間が1回当たり21時間⇒15.3時間となり 5.7時間短縮される。(取組B・C) 改革前は沖作業時間が8時間を越えていたものが改革後は8時間以内に完了する。</p> <p>○ 2隻の省エネ船の導入と4隻の減船により 燃油使用量 15,6450⇒14,6310 燃油費 1,486千円⇒1,169千円 それぞれ1,0140、317千円の削減。</p>	<p>資料集 P.5～6 8～10</p> <p>資料集 P.6 8～10</p> <p>資料集 P.7～ 10</p> <p>資料集 P.7～ 10、25</p>

大事項	中事項	現状と課題	取組記号・取組内容	見込まれる効果(数値)	資料集
生産に関する項目	改革型漁具の導入	<p>○ C漁場の網起しは人の手で行われていて、作業負担が大きい。</p>	<p>○ C漁場の網起し方法に環巻き方式を導入し、改革型作業船に備わる漁労機器を用いた網起し方式へ改革する。 (普及) 網</p>	<p>○ 作業負担軽減。 C漁場の網起し時間の短縮が図れる(再掲)。 45分⇒25分となり20分の短縮見込み。 網起しに必要な人員を削減。 C漁場の網起し人員を10人⇒6人へ削減し残りの人員はA漁場或いはB漁場の漁獲物選別作業にあたり出荷作業の効率化を図る。 ◆ 検証方法 操業時の安全性を検証する。潜水回数・日々の網起し時間、年間の網交換時間、燃油使用量を把握し、計画との比較を行う。</p>	資料集 P.6 8~10
		<p>○ 地域では潜水作業を伴う網交換が行われてきたが(再掲)、網交換に時間が掛かり、作業負担が大きい。</p>	<p>B 合理的な漁具の導入(A漁場) ○ 浮子付き漁具(登り運動場・第一箱網・第二箱網・肘金庫網)を導入し、潜水作業無しでの網交換作業を補佐するほか、網交換時間の短縮を図る。 側資材の一部を金属ワイヤーから化繊ロープに変更し、資材費の抑制を図る。 (普及) 網</p>	<p>○ 取組Aと合わせて、安全性・作業性の向上が見込める。 取組A・Cの効果と合わせて網交換時間が1回当り5.7時間短縮される(再掲)。 側資材の導入コストが44千円削減。 ◆ 検証方法 過去の網交換時間との比較。資材費の比較を行う。</p>	資料集 P.11
		<p>○ 網交換時、現本船の漁撈機器では第一箱網と第二箱網は網を3分割にしなると回収が出来ないため、網交換に時間が掛かる。</p>	<p>C 分割箇所の変更(A漁場) ○ 第一箱網と第二箱網の網分割を3分割から2分割へと改革する。 (新規) 網</p>	<p>○ 作業負担の軽減。 網交換時間が1回当り21時間⇒15.3時間に短縮する。5.7時間の短縮(再掲)。 台風接近時等の緊急の網抜きにも効果を発揮する。 ◆ 検証方法 過去の網交換時間との比較、緊急網抜き時の時間比較を行う。</p>	資料集 P.12

大事項 生産に関する項目	中事項 改革型漁具の導入	現状と課題	取組記号・取組内容	見込まれる効果(数値)	資料集 P. 13
		<p>○ 網交換作業はその作業負担の大きから1回/年のみ行われており、汚れた網での作業期間がある。漁獲損失や事故の危険性が高い。</p>	<p>D 網交換サイクルの変更(A漁場)</p> <p>○ 取組A・取組B・取組Cの効果が容易になるため、1回/年であった網交換を2回/年に増やす。 (普及) 網</p>	<p>○ 汚れた網での漁獲損失や漁具事故の危険性を抑えることが可能となる。年間の網交換回数が2回となり時間が改革後15.3時間×2回→改革前21時間×1回→9.6時間に増加するが各種リスクの軽減を図る。 ◆ 検証方法 過去の漁獲量や事故との比較。網交換時 間の比較を行う。</p>	
		<p>○ 太地定置は等深線に対し垂直に設置されているため、魚群の多くは定置網の外側の網に当たり、沖を通過していくため獲り不足が懸念されている。</p>	<p>E 網設置の効率化(A漁場)</p> <p>○ 沖へ向けて道網を新設し、魚群を網内へ誘導する。 (応用) 網</p>	<p>○ 年間5%の漁獲量増加を見込み 年間平均水揚量406.8t×5%=20.3tの水揚量増加。 年間平均単価300円×20.3t=6,090千円の水揚高増加。 ◆ 検証方法 漁獲量の比較。目視での確認を行う。</p>	資料集 P. 14
		<p>○ 沖での選別漁獲・出荷調整のために肘金庫網を第二箱網の沖側のみに設置しているが、ブリ類が大量に入網すると「スレ」ブリが発生してしまう。</p>	<p>F 肘金庫網の増設(A漁場)</p> <p>○ 沖側に加えて丘側にも肘金庫網を設置する。 (普及) 網</p> <p>○ 選別漁獲・出荷調整の拡大を図る。 (普及) 網</p>	<p>○ ブリ類を2箇所の手金庫網で取り分けることで選別作業の軽減を図る。網内の魚密度を低下させ「スレ」ブリの発生を抑える。 魚密度が0.8m³/1本⇒1.6m³/1本に拡大 ○ ブリ類の単価保持が期待できる。 ◆ 検証方法 肘金庫網で水揚げされる漁獲物の数量・「スレ」具合の比較。魚価の比較を行う。</p>	資料集 P. 15
	資源管理に関すること	<p>○ A漁場・B漁場・C漁場は20日間以上の連続休漁を行っている。</p>	<p>G 資源管理による措置</p> <p>○ 継続実施。 ○ 和歌山県資源管理指針を遵守するほか自主的に漁場環境の改善に取り組む。 ○ 登り運動場の網目合いを180mmから240mmへと拡大する(取組B) (継続) 資源</p>	<p>○ 資源保護。 クロマグロの資源管理。 漁場環境の改善。 ○ 小型魚の資源保護。 ◆ 検証方法 資源量の確認。過去との比較。</p>	資料集 P. 16

大事項 生産に関する項目	中事項 乗組員の育成に関する事項	現状と課題	取組記号・取組内容	見込まれる効果（数値）	
	乗組員の育成に関する事項	<ul style="list-style-type: none"> ○ 定置乗組員は40歳以上が大半を占め、平均年齢は45歳である。将来的に乗組員の安定確保が懸念される状況にある。 ○ 年齢構成等を配慮した採用計画を立てている。 ○ 乗組員は別業種から転職してくる者が多く、熟練した技術の継承が難しい状況にある。 	<p>H 新規就業者の安定的な確保対策</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 中学生・高校生の体験実習を受け入れられる。(最大で5人を2回/年受け入れ予定) <u>(普及)人</u> ○ 継続実施。 <u>(継続)人</u> ○ 定置網漁業者のOBによる技術指導を実施する。(網・側修理等の講習会を6回/年行う) 外部の研修機関と連携し若手乗組員の育成を図る。 <u>(継続)人</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 中学生・高校生が定置網を体験する事により、漁業への理解を深め将来の乗組員確保に期待が持てる。 ○ 計画的な採用により人材のバランスが保てる。 ○ 自ら網の修理が行えるよう、補修技術を継承する。 将来的には修繕費の削減が見込める。 ◆ 検証方法 ヒアリング調査などで効果を把握する。 	資料集 P.17
流通販売に関する事項	出荷販売先の多様化と出荷戦略	<ul style="list-style-type: none"> ○ 仲買人が減少し、需要が拡大せず水揚げ金額が伸び悩んでいる。 ○ 漁業者は入札権を有しているが、現在には行使していない。 ○ 仲買人に落札された漁獲物は主に地域外へ流通し、地域内で流通する漁獲物は少ない。 ○ 「スレ」ブリの単価が安い。 ○ 太地町がふるさと納税の参加を募集している。 	<p>I 販路の拡大</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 定置網で漁獲された鮮魚を漁業者が入札に参加して、道の駅での販売用に買い戻す。 ○ 地元や近隣地域住民、観光客を対象に漁業者が道の駅で直接販売を行う。 <u>(新規)販路</u> ○ 漁業者が「スレ」ブリを加工し、切り身として道の駅で直接販売する。 <u>(新規)販路</u> ○ 太地町が募集している「太地町ふるさと納税推進事業」に参加申請し、漁獲物を漁業者が直接納税者に送付する。代金は太地町に請求する。 <u>(新規)販路・宣伝</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 漁業者が入札に参加することにより、市場でのセリが活性化される。 ○ 定置網の漁獲物を地域内で流通させることが可能となる。 ○ 道の駅で朝獲り魚を販売することにより、収入が5,046千円増加する。 ○ 「スレ」ブリを適正価格で販売することにより、収入が1,171千円増加する。 <p>資料集 P.18～ 19、26</p> <p>資料集 P.20、 26</p> <p>資料集 P.21</p>	<p>合計 5,046千円+1,171千円=6,217千円 道の駅での収入金額増加。 販売経費 4,537千円 差引利益額 1,680千円</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 地元以外での消費拡大のほか、ふるさと納税をした全国の人々に対して、太地町の新鮮な魚をPRできる。 ◆ 検証方法 取組の実施を確認し、計画との比較を行う。

大事項	中事項	現状と課題	取組記号・取組内容	見込まれる効果(数値)	
地域活性化に関する事項	<p>○ 太地町の朝市実行委員会が4回/年開催する「本気の朝市」に漁業者が参加している。</p> <p>○ 太地町地方卸売市場は優良衛生品質管理市場であるが、広く認知されていない。</p> <p>○ 太地定置の漁獲物であることをアピールできていない。</p> <p>○ 漁港周辺にはくじらの博物館・梶取崎などがあり、くじらの町として認知されている。</p>	<p>J イベントによる交流人口の増加</p> <p>○ 朝市の会場を道の駅へ誘致し、イベントの活性化を図る。</p> <p>○ 漁業者は継続参加する。</p> <p>○ 地元中学生が販売するフィッシュバーガーへの材料提供を行う。</p> <p>○ メディアを利用して広報を行い集客に繋げる</p> <p style="text-align: center;">(継続) 宣伝</p> <p>○ 優良衛生品質管理市場の魚であることを示すのぼり旗やポスター等を使い宣伝する。</p> <p style="text-align: center;">(応用) 宣伝</p> <p>○ 「太地大敷」と明記したシールやタグを取り付け、新鮮な魚をアピールする。</p> <p style="text-align: center;">(応用) 宣伝</p> <p>○ 森浦湾鯨の海構想に継続参加し、事業に協力する。</p> <p style="text-align: center;">(継続) 地域</p>	<p>○ イベントの集客力により販売量の増加及び太地定置の認知度が向上する。</p> <p>○ 朝市に参加する漁業者・加工業者・仲買人が一体となり取り組める。</p> <p>○ 消費者は、衛生管理された漁獲物を安心して購入できる。</p> <p>○ 太地定置漁獲物の認知度が向上する。</p> <p>○ 太地の町民と一体となり、当地域が活性化する。</p> <p>◆ 検証方法 アンケートやヒヤリング調査などで効果を検証する。</p>	資料集 P. 22	
					資料集 P. 23
					資料集 P. 23
					資料集 P. 24

(4) 改革の取組み内容と支援措置の活用との関係

① 漁業構造改革総合対策事業の活用

取組 記号	事業名	改革の取組内容との関係	事業実施者	実施年度
A～K	もうかる漁業創設 支援事業	改革型漁船と改革型漁具 による安全性向上の実証 船名：未定丸 総トン数：19トン型 船名：未定丸 総トン数：7.5トン型 定置網：改革型漁網 (A漁場・C漁場)	太地町漁業協 同組合	H29～31 年度

② 関連する支援措置

取組 記号	事業名	改革の取組内容との関係	事業実施者	実施年度
H	定置網体験	中学生、高校生が定置網を 体験することにより漁業へ の理解を深め、人材確保を 図る。	太地町漁業協 同組合 太地町中学校	H29～31 年度
I	道の駅事業 【国費】【町】	道の駅における漁業者に よる鮮魚の販売	太地町 太地町漁業協 同組合	H29～31 年度
I	ふるさと納税 【町】	太地町ふるさと納税推進事 業に参加申請し漁獲物を漁 業者が直接納税者に送付す る。	太地町 太地町漁業協同 組合	H29～31 年度
J	朝市支援事業	太地町と朝市実行委員会と の連携の下で「本気の朝市 」での漁獲物の販売	太地町 朝市実行委員会	H29～31 年度
	固定資産税の免除	漁船及び漁網に対する固 定資産税の免除	太地町	H29～31 年度

(5) 取組みのスケジュール

① 工程表

(点線：検討・導入期間、実線：実施・普及期間)

年度		H28	H29	H30	H31	H32	H33	H34
A	改革型漁船の導入	---	---	---	---	---	---	---
B	合理的な漁具の導入	---	---	---	---	---	---	---
C	網分割箇所の変更	---	---	---	---	---	---	---
D	網交換サイクルの変更	---	---	---	---	---	---	---
E	網設置の効率化	---	---	---	---	---	---	---
F	肘金庫網の増設	---	---	---	---	---	---	---
G	資源管理	---	---	---	---	---	---	---
H	新規就業者の安定的な確保対策	---	---	---	---	---	---	---
I	販売の拡大	---	---	---	---	---	---	---
J	イベントによる交流人口の増加	---	---	---	---	---	---	---
K	毎年の効果検証と改善			---	---	---	---	---

② 改革の取組みによる波及効果

本計画の潜水作業を伴わない定置網操業が実証されれば、今日も潜水作業が行われている近隣及び太平洋沿岸の定置網漁業に広く波及することが考えられ、定置網操業の安全性向上・乗組員の待遇改善に大きく寄与出来るものである。

生産性・収益性向上の取組では経営の安定化が図られ、地域の定置網経営のモデルとなる。漁業経営の安定化は乗組員の労働意欲向上、生活の安定、後継者確保に繋がり定置網漁業の持続的な発展に繋がる。

道の駅で漁業者による直接販売は販路の拡大・6次産業化に繋がり、これまで近隣地域では実例のない取組となる。安定した供給・需要体制が確立されれば漁業者の新しいビジネスモデルとなりうる。

また、定置網漁業の水揚げによって、地元の消費者や流通業者・加工業者に対して安定的な水産物の提供源となり、地域の活性化が期待出来る。

4. 漁業経営の展望

<経費等の考え方>

当プロジェクト計画では改革型漁船及び改革型漁具を導入することで、安全性や生産性・作業効率を向上させる。さらに魚価の付加価値の向上に取組み、定置網漁業の収益性改善を図る。

<定置網漁業>

(1) 収益性改善の目標

(単位:水揚量はトン、その他は千円)

	現状	改革1年目	2年目	3年目	4年目	5年目
収入	138,989	151,296	151,296	151,296	151,296	151,296
水揚量	501	521.3	521.3	521.3	521.3	521.3
水揚高	138,989	145,079	145,079	145,079	145,079	145,079
道の駅での収入	0	6,217	6,217	6,217	6,217	6,217
経費	116,844	211,790	211,526	210,918	144,311	144,163
人件費	70,991	66,258	66,258	66,258	66,258	66,258
燃油代	1,488	1,079	1,079	1,079	1,079	1,079
氷代	1,814	1,904	1,904	1,904	1,904	1,904
修繕費	1,997	1,097	1,097	1,097	1,097	1,097
漁具費	11,028	9,690	9,690	9,690	9,690	9,690
その他	1,195	1,195	1,195	1,195	1,195	1,195
保険料	1,134	2,859	2,595	2,368	2,160	1,972
公租公課	0	0	0	0	0	0
販売経費	8,335	8,909	8,909	8,909	8,909	8,909
道の駅での経費	0	4,537	4,537	4,537	4,537	4,537
一般管理費	16,944	16,944	16,944	16,944	16,944	16,944
減価償却費	0	95,400	95,400	94,999	28,600	28,600
退職給付引当金	1,918	1,918	1,918	1,938	1,938	1,978
利益	22,145	-60,494	-60,230	-59,622	6,985	7,133
償却前利益	22,145	34,906	35,170	35,377	35,585	35,733

上記金額は税抜き金額

(算定基礎)

現状は、平成22～26年度の5年間のうちの最大値と最小値を省いた3年間の平均値を用いた。

① 水揚量

網設置の効率化(取組E 資料集P.14)によりA漁場の水揚量が10%の半分程度となる5%の増加を見込む。A漁場の年間平均水揚量 $406.8t \times 5\% = 20.3t$ の水揚量増加。

A漁場の水揚量は現状 $406.8t + 20.3t = 427.1t$

B漁場の水揚量は現状維持で $84.3t$

C漁場の水揚量は現状維持で $9.9t$

計 $521.3t$ の水揚量見込み。

② 水揚高

網設置の効率化(取組 E 資料集 P.14)により A 漁場の水揚量が 20.3t 増加することから、 $20.3t \times A$ 漁場の平均単価 300 円/kg=6,090 千円の水揚高増加(参考資料 4 資料集 P.27)。

A 漁場の水揚高は現状 122,276 千円+6,090 千円=128,366 千円

B 漁場の水揚高は現状維持で 13,800 千円

C 漁場の水揚高は現状維持で 2,913 千円

計 145,079 千円の水揚高見込み。

③ 道の駅での収入

販路の拡大①(取組 I 資料集 P.19)道の駅での鮮魚販売により 5,046 千円。

販路の拡大②(取組 I 資料集 P.20)道の駅での「スレ」ブリの販売により 1,171 千円。

計 6,217 千円の道の駅での収入。

④ 人件費

改革型漁船の導入(取組 A 資料集 P.6~10)により乗組員の人数を 15 人から 14 人に削減。福利厚生費を含め 14 人分の人件費を計上。計 4,733 千円減少。

⑤ 燃油代

改革型漁船の導入(取組 A 資料集 P.6~10)による省エネ効果と減船(5 隻⇒3 隻)効果から、燃油消費量が 15,645ℓ⇒14,631ℓ 燃油代が 1,486 千円⇒1,169 千円となり、それぞれ 1,014ℓ、316 千円の削減。実勢価格 73 円/ℓの 10%増しとした単価 80 円/ℓとして算出。

⑥ 氷代

漁獲量の 5%増加(取組 E 資料集 P.14)により 5%の氷代増加を見込む。

現状 1,814 千円×5%=90 千円増加。

⑦ 修繕費

改革型漁船の導入(取組 A 資料集 P.6~10)による減船効果で、機関・油圧修繕費、各種作動油、上架料等の減少を見込む

(現状) 上架料 795 千円+補修費 1,202 千円=1,997 千円

上架料・補修費は 5 隻分の費用

(改革後) 上架料 400 千円+補修費 697 千円=1,097 千円

補修費は改革型本船 447 千円・改革型作業船 150 千円・網積み船 100 千円を見込む。上架料は 3 隻分で 400 千円を見込む。全ての船舶は 19t 未満のため定期検査は不要。

計 1,097 千円となり 900 千円削減。

⑧ 漁具費

防藻加工費および補修資材費を計上。

(現状) 防藻加工費 6,305 千円 + 資材費 4,723 千円 = 11,028 千円

防藻加工費の明細は取組 D(資料集 P. 13)に記載。

資材費はロープ類やその他で 3,090 千円 補修網で 1,622 千円。計 4,723 千円

(改革後) 防藻加工費 6,690 千円 + 資材費 3,000 千円 = 9,690 千円

防藻加工費は肘金庫の増設分を含む(取組 F 資料集 P. 15)。

資材費は新調もしくは整備済の漁具を使用することから減額を見込み、ロープ類やその他で 2,000 千円 補修網で 1,000 千円。計 3,000 千円

計 1,338 千円の削減。

⑨ その他

陸上車両の修繕費、陸上車両車検料・燃料費、海上通信費等。

⑩ 保険料

改革型本船、改革型作業船、網積み船の漁船保険料を計上。施設共済には未加入。

⑪ 公租公課

太地町では漁船・漁具の固定資産税は課税免除の為計上なし。

⑫ 販売経費

水揚高増(取組 E 資料集 P. 14)により市場手数料の増加を見込む。

水揚高増加分 6,090 千円 × 市場手数料 6% = 365 千円増加。

⑬ 道の駅での経費

トレー費	382,112	300g 入りトレー 23,882 枚 × 16 円(パーティも含む)
輸送費	13,554	往復 3.6km × 251 日 ÷ 燃費 10km/ℓ × 単価 150 円/ℓ
人件費	3,000,000	パック詰め、加工の人件費
その他の経費	250,000	シール・チラシ・のぼり旗など
手数料	891,800	道の駅委託料金 売上額 × 10%
計	4,537,466	

各種費用で 4,537 千円を見込む。

⑭ 一般管理費

祭典式典および施設修繕寄付金の歳出を控えて 3,000 千円の削減を見込む。その他は現状維持で下記の費用を計上。

役員報酬・事務員給与	10,575 千円	関係団体負担金	700 千円
事務所維持管理費用	2,836 千円	漁獲共済	625 千円
会議費	1,560 千円	その他の費用	648 千円
計 16,944 千円を見込む。			

⑮ 減価償却費

今計画で導入する改革型漁船（7年定額）、改革型漁具（3年定額）の減価償却費を計上。現在所有している船・網は償却済み。

⑯ 退職給付引当金

定置網組合の従業員・役職者の退職金を計上。

(2) 次世代船建造の見通し

改革 1～3 年目は改革型漁具の減価償却費用が大きいため、利益の確保は難しいが 4 年目以降は利益が確保できる見込み。償却前利益に関しては改革 1 年目から確保でき、次世代船建造の見通しは確保できる見込み。

償却前利益		次世代船建造までの年数		漁具・漁船価
35百万円	×	25年	>	857百万円※
				内訳
				漁船
				240百万円
				本船 160百万円
				台前船 50百万円
				網積船 30百万円
				漁具
				617百万円
				A漁場 250百万円
				B漁場 100百万円
				C漁場 20百万円
				計370百万円
				漁具の耐用年数を15年として
				370百万円×25/15年=617百万円

償却前利益は、改革計画 5 年間の平均値。

※ 現状の船舶の使用年数（30年以上）、及び漁網の使用年数（15年以上）を考慮し漁船の耐用年数は 25 年、漁網の耐用年数は 15 年として算出した。

(参考1) 漁獲共済+積立ぶらずが補填された場合の経営効果 (仮定に基づく試算)

※燃油高騰に対するセーフティネット構築事業には加入しておりません

	現状	改革1年目 (参考)	水揚量の変動した場合の試算				
			改革1年目	2年目	3年目	4年目	5年目
収入	138,989	151,296	136,775	165,180	136,775	165,180	136,775
水揚量	501	521.3	452	550	452	550	452
水揚高	138,989	145,079	130,558	158,963	130,558	158,963	130,558
(A漁場)	122,276	128,366	115,290	140,940	115,290	140,940	115,290
(B漁場)	13,800	13,800	12,355	15,110	12,355	15,110	12,355
(C漁場)	2,913	2,913	2,913	2,913	2,913	2,913	2,913
道の駅での収入	0	6,217	6,217	6,217	6,217	6,217	6,217
経費	116,844	211,790	213,944	213,941	213,072	146,726	146,317
人件費	70,991	66,258	64,800	67,716	64,800	67,716	64,800
燃油代	1,488	1,079	1,079	1,079	1,079	1,079	1,079
水代	1,814	1,904	1,713	2,094	1,713	2,094	1,713
修繕費	1,997	1,097	1,097	1,097	1,097	1,097	1,097
漁具費	11,028	9,690	9,690	9,690	9,690	9,690	9,690
その他	1,195	1,195	1,195	1,195	1,195	1,195	1,195
保険料	1,134	2,859	2,859	2,595	2,368	2,160	1,972
公租公課	0	0	0	0	0	0	0
販売経費	8,335	8,909	8,142	9,676	8,142	9,676	8,142
道の駅での経費	0	4,537	4,537	4,537	4,537	4,537	4,537
一般管理費	16,271	16,319	16,319	16,319	16,319	16,319	16,319
漁獲共済	673	625	625	625	625	625	625
積立ぶらず	0	0	4,570	0	4,570	0	4,570
減価償却費	0	95,400	95,400	95,400	94,999	28,600	28,600
退職給付引当金	1,918	1,918	1,918	1,918	1,938	1,938	1,978
利益	22,145	-60,494	-77,169	-48,761	-76,297	18,454	-9,542
償却前利益	22,145	34,906	18,231	46,639	18,702	47,054	19,058
補填金	0	0	12,928	0	12,928	0	12,928
補填後償却前利益		34,906	31,159	46,639	31,630	47,054	31,986

(仮定試算の算定基礎)

① 水揚量

水揚量 (t)	現状	改革1年目 (参考)	水揚量の変動した場合の試算				
			改革1年目	2年目	3年目	4年目	5年目
変動率			-10%	10%	-10%	10%	-10%
A漁場	406.8	427.1	384.3	469.8	384.3	469.8	384.3
B漁場	84.3	84.3	75.8	92.7	75.8	92.7	75.8
C漁場	9.9	9.9	9.9	9.9	9.9	9.9	9.9
計	501	521.3	470.0	572.4	470.0	572.4	470.0

A漁場・B漁場の水揚量が、改革後1・3・5年目は改革計画の-10%、2・4年目が改革計画の+10%に変動すると仮定し試算した。C漁場は現状維持とする。

② 水揚高・人件費・氷代・販売経費

水揚量の変動に伴い、各経費の増減を見込む。

③ 漁獲共済

漁獲共済掛金の漁業者負担額を計上。

A漁場 561千円（共済限度額109,901千円、約定20、契約割合30%）

B漁場 64千円（共済限度額10,620千円、約定30、契約割合30%）

計625千円

④ 積立ぶらす

積立金額の漁業者負担額を計上。

A漁場 4,570千円（払戻判定金額128,218千円、最大積立額4,570千円）

B漁場 440千円（払戻判定金額12,390千円、最大積立額440千円）

今仮定ではA漁場のみ払戻判定金額を下回るためA漁場分のみ記載。

⑤ 補填金

今仮定の水揚高の減少では漁獲共済の共済限度額を下廻らないため、払戻判定金額を下廻るA漁場の積立ぶらす補填金のみを記載。

払戻判定金額128,218千円－水揚高115,290千円＝12,928千円補填

上記以外の項目は改革計画書15～18ページと同様

（補填後の次世代船建造の見通し）

補填後の償却前利益 37百万円	×	次世代船建造までの年数 25年	>	漁具・漁船価 857百万円
--------------------	---	--------------------	---	------------------

水揚高の減少を仮定しても、共済等の補填により償却前利益が確保され次世代船建造の見通しが確保できる。

(参考) 改革計画作成に係る地域プロジェクト活況状況

実施時期	協議会・部会	活動内容・成果	備考
平成27年7月2日	第1回協議会	<ul style="list-style-type: none"> ・事業の概要報告 ・会長、副会長の選任 ・地域プロジェクト実施計画の説明 ・改革計画書案の説明 ・その他、今後のスケジュール等 	
平成27年8月12日	事務局打合わせ	<ul style="list-style-type: none"> ・改革計画書案について ・水産庁指導 	
平成27年10月1日	第2回協議会	<ul style="list-style-type: none"> ・改革計画書案について 	
平成27年10月26日	事務局打合わせ	<ul style="list-style-type: none"> ・改革計画書案について ・水産庁指導 	
平成28年2月17日	事務局打合わせ	<ul style="list-style-type: none"> ・改革計画書案について ・水産庁指導 	
平成28年4月20日	第3回協議会	<ul style="list-style-type: none"> ・事業実施者について ・改革計画書案について 	

太地町地域プロジェクト 改革計画



資料集

目次

➤ 本計画書内の定置網用語	1 ページ
➤ 参考資料(定置網 広域図・漁場図)	2～3 ページ
➤ 地域の定置網の現状	4 ページ
➤ 取組記号 A 改革型漁船の導入	5～10 ページ
B 合理的な漁具の導入	11 ページ
C 網分割箇所の変更	12 ページ
D 網交換サイクルの変更	13 ページ
E 網設置の効率化	14 ページ
F 肘金庫網の増設	15 ページ
G 資源管理	16 ページ
H 新規就業者の安定的な確保対策	17 ページ
I 販路の拡大	18～21 ページ
J イベントによる交流人口の増加	22～23 ページ
➤ 参考資料	24～27 ページ

本計画書内の定置網用語

- 側がわ

定置網の骨格に相当するワイヤーロープ浮子いかりつなや碇網、土俵等なども含む。その中でも碇網と直結して一番大きな負荷の掛かる2本のワイヤーロープを本側と呼ぶ。

- 操業

定置網の仕事全般を指す。
主には漁獲行為(網起こし)、陸上・海上での網保守など。

- 網起こし

日々の魚を漁獲する作業。
当地区では完全環巻き操業を行っている。
※環巻き方式とは網に取り付けたロープを巻き上げることで魚を追い込み漁獲する省力化に有効な網起こし方式。

- 魚汲みうおくみ

網に入った魚を追い詰め、海から船へ魚を掬う作業。

- 網交換

漁場に常設してある網が汚れた際に、メンテナンスの終了した綺麗な網と取り替える作業。網抜き・網入れで1工程となる。

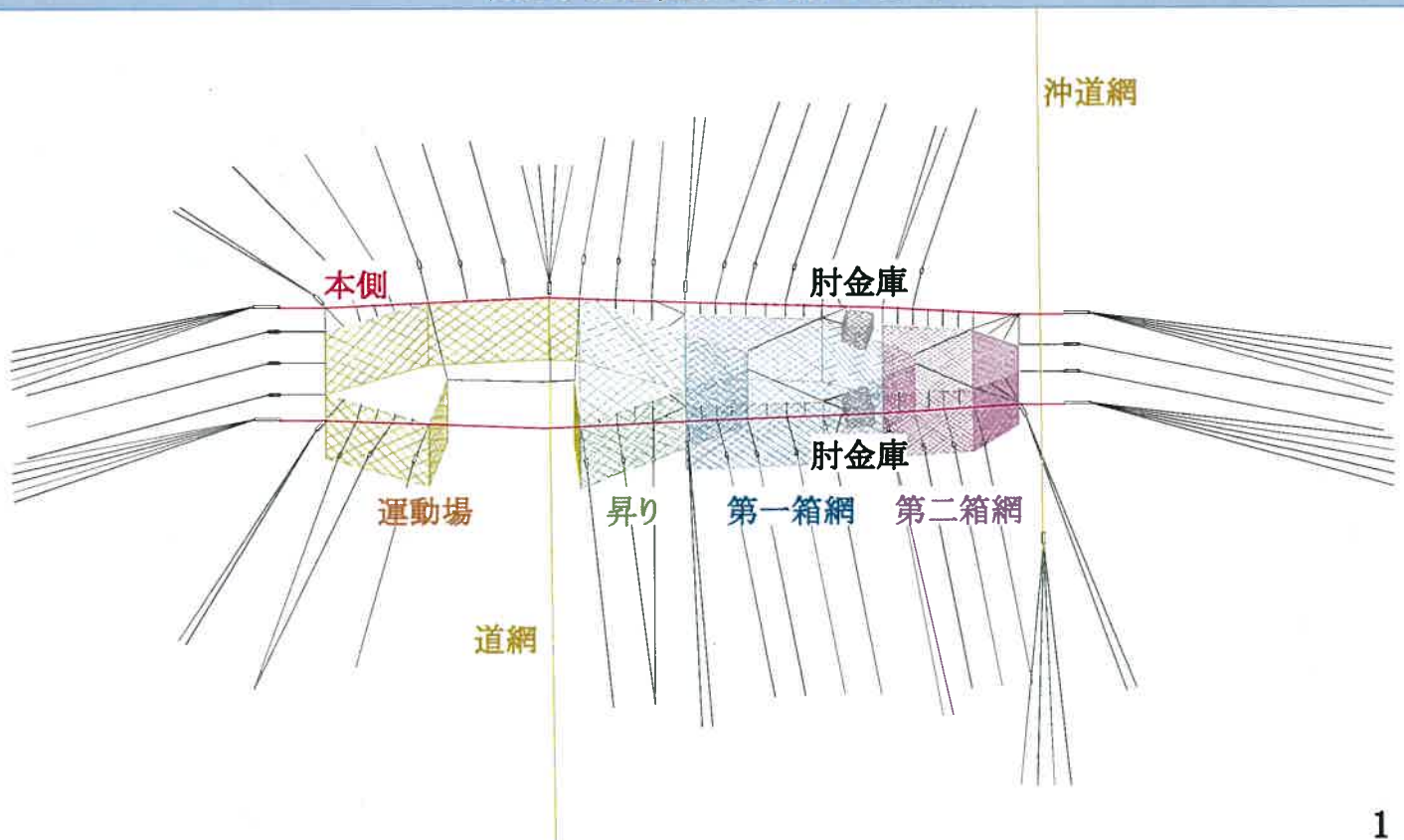
- 沖作業

各漁場の漁期が始まる時期と終わる時期に、側ワイヤーを回収・設置する作業。漁期中でも汚れ落としや形を整える作業がある。

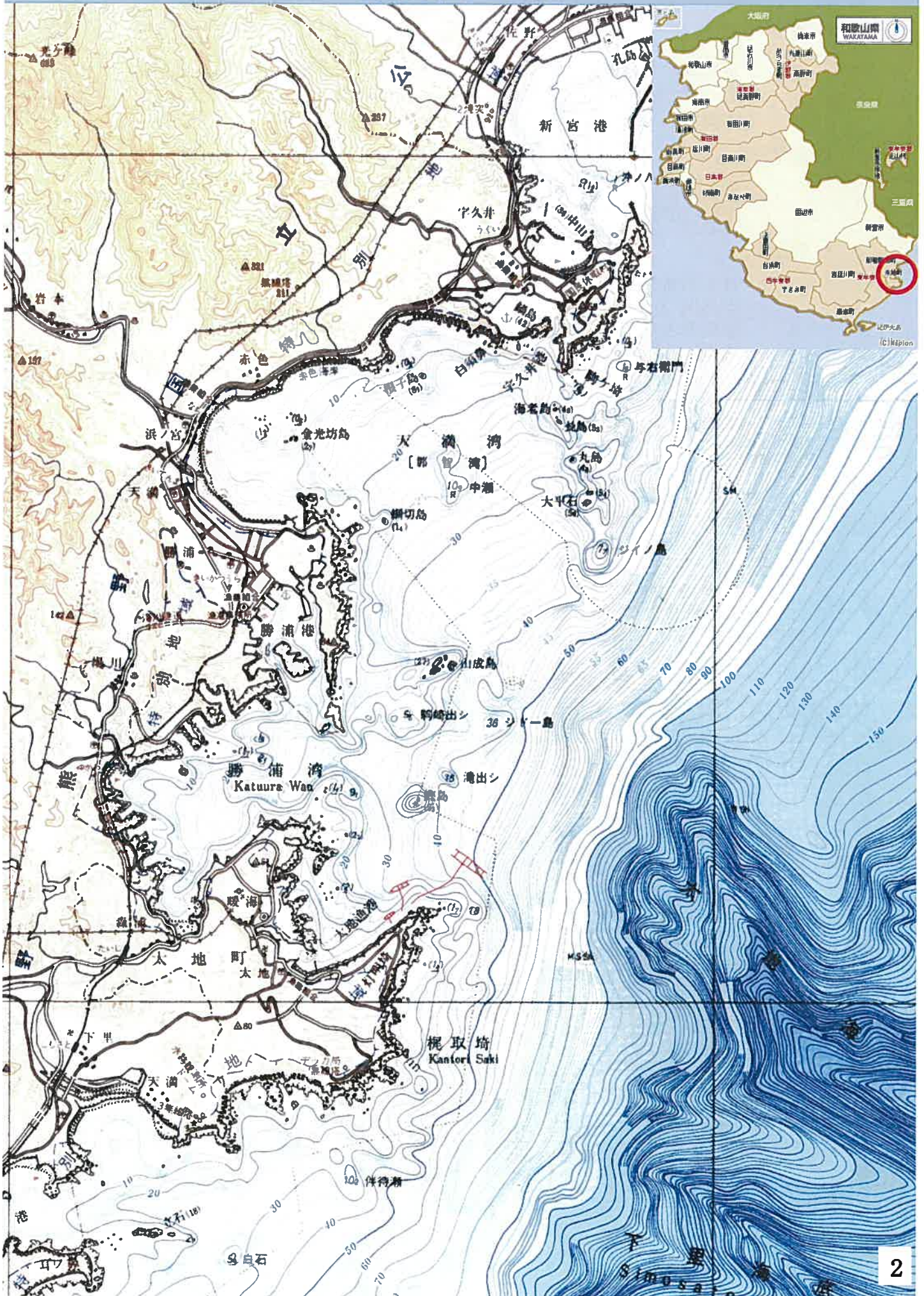
- 浮子あば

定置網の重量物を浮かせる浮力体。

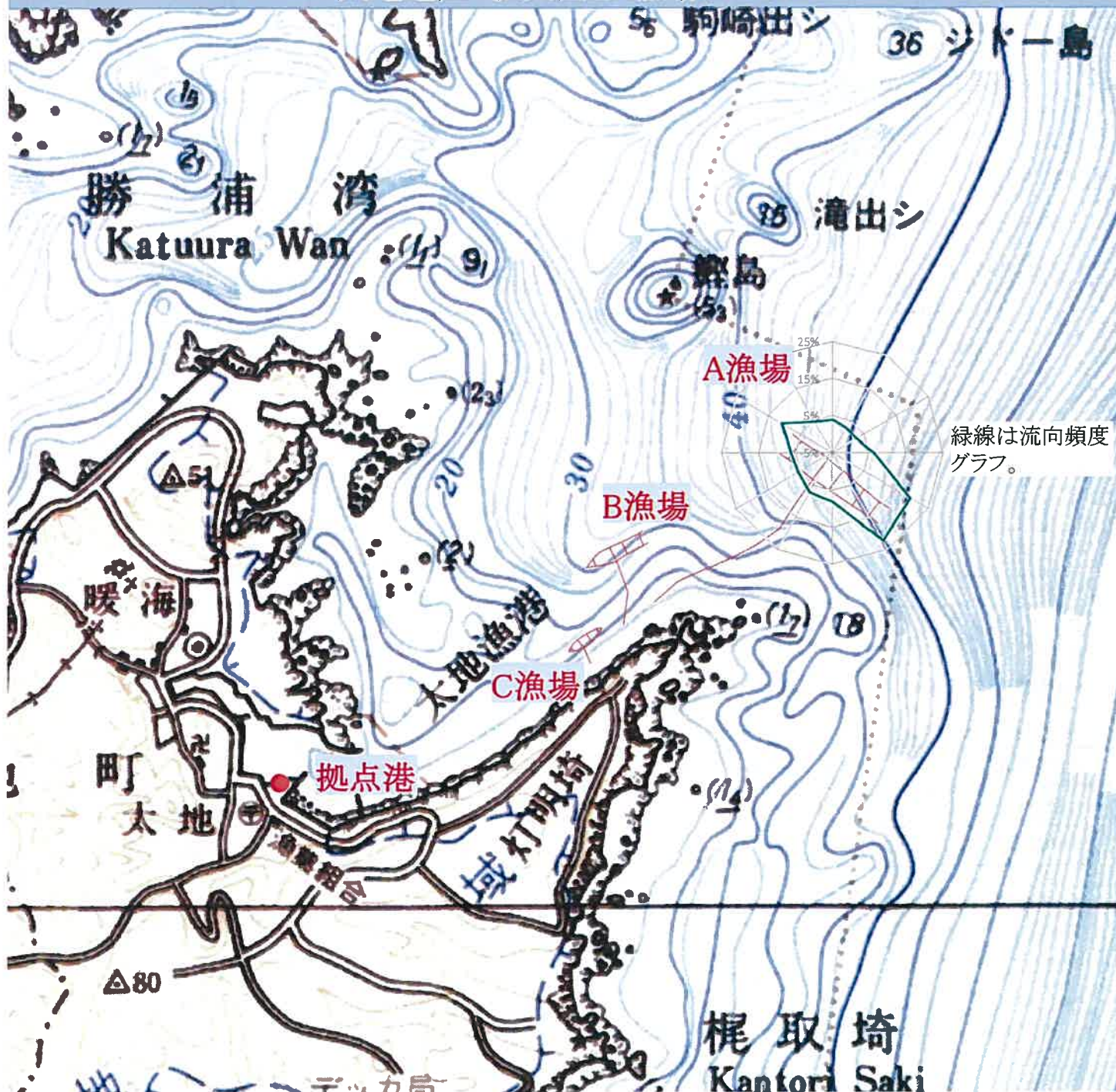
一般的な定置網各部の名称



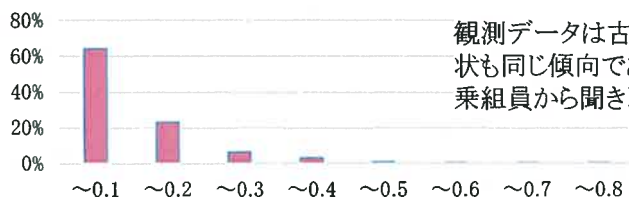
太地地区 広域図



太地地区 拡大図とA漁場データ



A漁場 流速頻度グラフ
(平成17年2～3月に計測)



観測データは古いが、現状も同じ傾向であることを乗組員から聞き取り。

網規模	網全長
A漁場	414m
B漁場	234m
C漁場	150m

A漁場の操業状況 (平成22～26年の5中3平均)

出荷可能日数 (漁具の準備が整い休 市日を除いた日数)	網起し日数	時化・急潮による 網起し不能日	操業率 (網起し日数÷出荷可 能日)
168日	140日	28日	83%

地域の定置網の現状

定置網漁場の種類

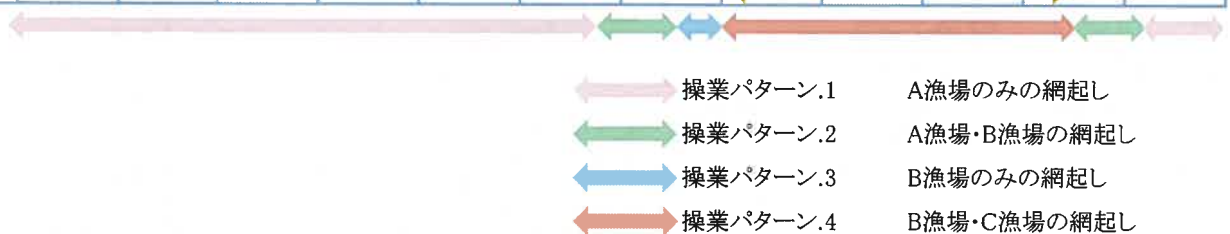
漁場名	種類	操業体制		漁獲時期	
			網起し		沖作業
A漁場	大型定置網	人員	15人	船上 10人 潜水 5人 (潜水作業の詳細は5ページに記載)	11月～7月
		船数	2隻 環巻き		
B漁場	大型定置網	人員	15人		6月～12月
		船数	2隻 環巻き		
C漁場	小型定置網	人員	10人	船数 4隻	8月～11月
		船数	1隻 手起し		

定置網の船団構成

船数 5隻	船齢	主な用途
本船	10年	A漁場・B漁場網起し、各種作業
台前船	35年	A漁場・B漁場台前船、C漁場網起し船。各種作業
作業船	31年	網交換・漁期初末の作業
作業船	33年	網交換・漁期初末の作業
網積み船	36年	網交換作業

年間のスケジュール

漁獲期間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
A漁場	→											←	
B漁場						←	→						
C漁場								←	→				



日々のスケジュール

	5時	6時	7時	8時	9時	10時	11時	12時
冬季 11月中～ 7月中		← 操業パターン.1 A漁場 網起し		← 漁具メンテナンス				
		← 操業パターン.2 A漁場 網起し		← B漁場網起し	← 漁具メンテナンス			
夏季 7月～ 11月中	← 操業パターン.3 B漁場網起し		← 漁具メンテナンス					
	← 操業パターン.4 B漁場網起し		← C漁場網起し	← 漁具メンテナンス				

現状の課題

現状の船団構成では下記の作業が船上で行うことが出来ず、網交換や沖作業時に乗組員が海へ入り、危険で身体に負担の多い潜水作業が必要となっている。

1. 側ワイヤーと網を連結している吊ロープ(12mmのPPロープ)の結束・切断(図1)
2. 各種ロープを縛る作業(図2)

潜水作業は1回あたり5人で行い約2時間の作業時間。年間約40回の作業がある。

図1

網は浮子の付いた側ワイヤーから吊り下げ設置してある(登り運動場・道網)。

網入れ時は吊りロープを縛る。
網抜き時は吊りロープを切る作業が必要となる。

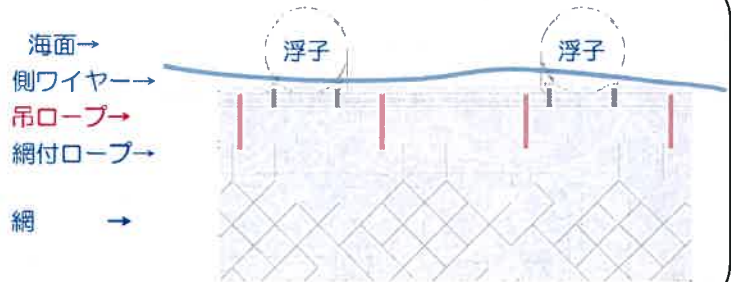
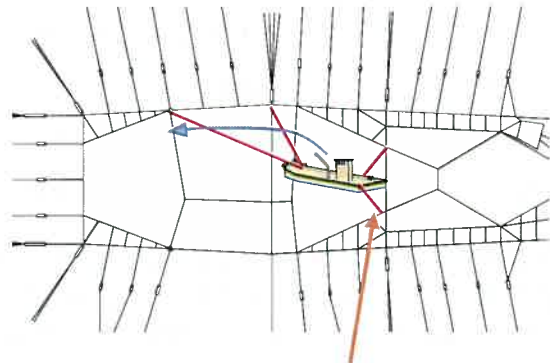


図2

船から漁具を繰り出す時や回収する時、漁具が船のプロペラに絡み漁具・船共に破損する恐れがある。そのため潜水夫が側ワイヤーにロープを取り付け、それをキャプスタンで巻き上げ船を移動させている。



網入れ時の状態
写真の状態ではプロペラを回せない



船の移動用ロープを取り付ける必要がある。

また各種ロープを海上から船に取り上げるために、潜水夫が船からの連絡ロープを海上で浮遊しているロープに縛っている。



海上を浮遊しているロープに連絡ロープを縛る

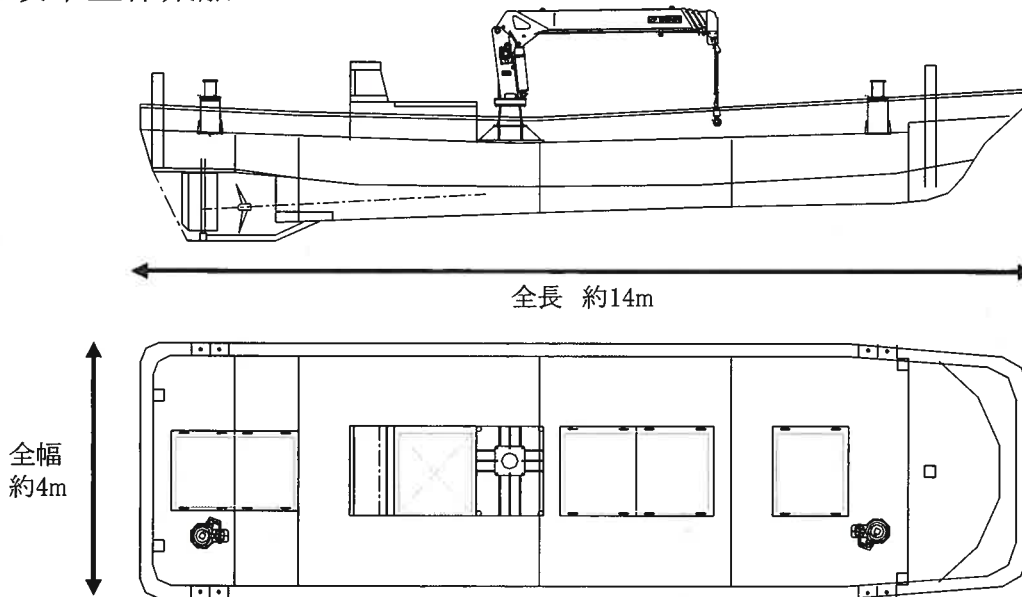
縛った後、連絡ロープを巻くことで浮遊しているロープを船に取り込んでいる。

取組記号 A-1 改革型作業船の導入

目的

- 危険で身体に負担の多い潜水作業を廃止し、船上での沖作業完了を実現させる。
- C漁場の労働負担軽減(C漁場の環巻き網起しを実現する⇒全漁場が環巻き式となる)。

○改革型作業船



主要装備	用途	効果
2t巻きキャプスタン2機	各種作業、C漁場の環巻き網起し	軽労働化
クレーン	各種作業、C漁場の魚汲み	軽労働化
フラップ付きラダー	可動フラップ付きの舵	旋回性向上
低燃費エンジン	省エネを考慮した漁船用エンジン	省エネ
断熱魚艙	C漁場の漁獲物を積載する	鮮度保持

- 上記装備により機械力・旋回性能の向上が図られ、これまで潜水作業で行っていた吊りロープの連結やロープの取り回しを改革型作業船で行うことが可能となる。
- 網起し時にはA漁場・B漁場の台前船として機能するほか、C漁場の単船網起し船として機能する。
- C漁場の環巻き網起し方式・機械化の導入により、作業負担軽減・網起し時間の短縮が図れる。

見込まれる効果

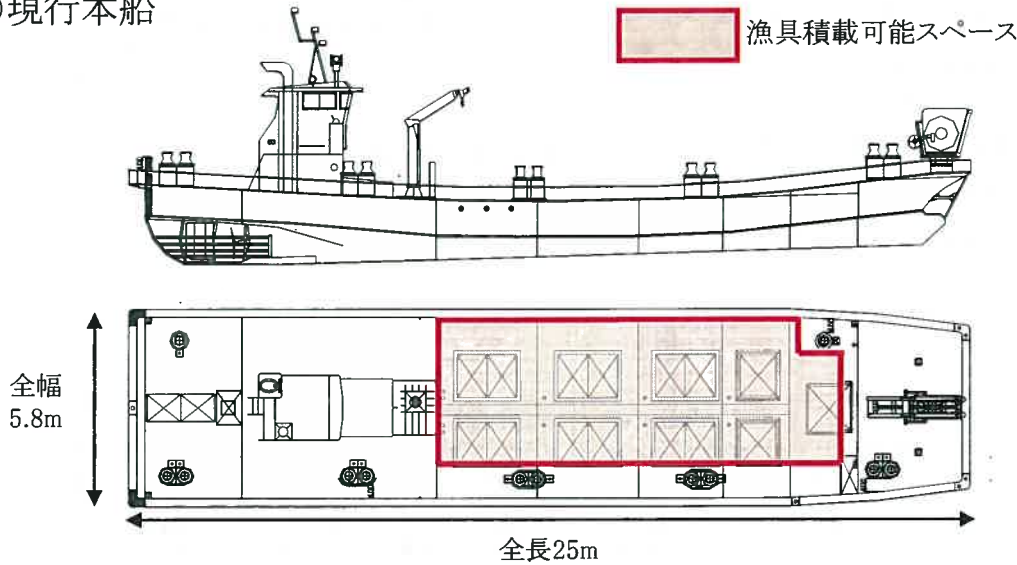
- 機動性が高く、機械力のある改革型作業船の導入により、潜水作業を廃止し乗組員の安全を確保する。また網交換作業が船上で行うことが可能となり、後述の取組B(11ページ)・取組C(12ページ)と併せて作業負担の軽減、時間短縮を図れる。
- A漁場・B漁場の台前船として使用する他、C漁場の単船網起し船としても使用する。
改革前 C漁場の網起し時間が30分+魚汲み15分
改革後 C漁場の網起し時間が15分+魚汲み10分になり計20分網起し時間が短縮する。
(作業時間の詳細は 10ページに記載)
- 既に環巻き方式となっているA漁場・B漁場と同様に、C漁場にも環巻き方式を導入し、網起しの人員を10人から6人に削減。残った人員は港でのB漁場の漁獲物の選別作業にあたる。

取組記号 A-2 改革型本船の導入

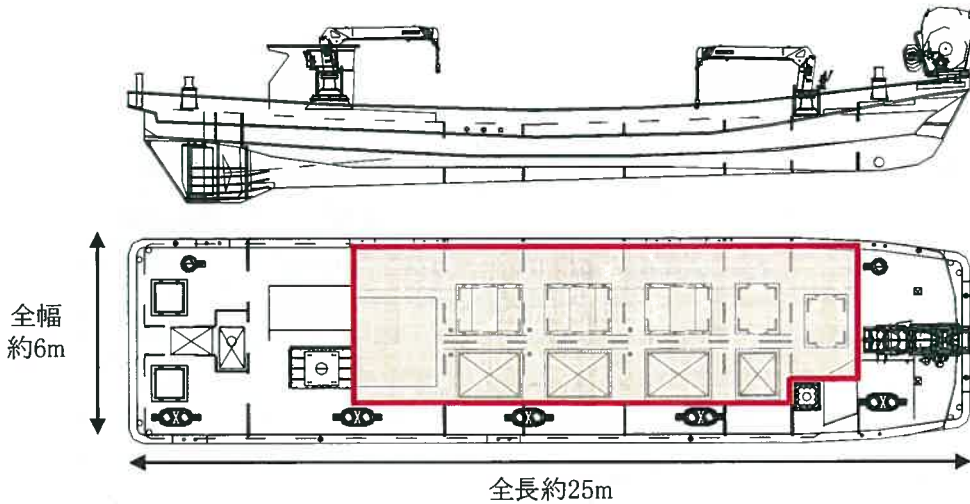
目的

- 現行本船では甲板スペースが狭く、合理的な漁具(取組B 11ページ)を積載すると安全性に不安がある。またネットホーラーサイズが小さいため、2枚割りの漁具(取組C 12ページ)を機器内に通すことが出来ず、海上からの網回収が不可能である。
- 広い甲板スペースを持ち、大型漁具が回収可能となる大型ネットホーラーを搭載した改革型本船を導入し、安全性と作業効率の向上を図る。
- 各種漁撈機器の導入により、省力化・省人化を図る。

○現行本船



○改革型本船



- 全長は同じだが全幅で0.2m拡大、積載スペース長さで約2.4m拡大。
- 甲板積載スペースが約50㎡⇒約64㎡と約30%広がるため、浮子付の大型漁具(取組B)を安全に積載することが可能となる。
- 2枚割漁具(取組C 12ページ)の回収が可能となる大型ネットホーラーを導入する。

主要装備	用途	効果
クレーン2基	各種作業、網起こし	軽労働化
ツインキャブスタン5機	各種作業、網起こし	軽労働化
シングルキャブスタン2機	各種作業、網起こし	軽労働化
大型ネットホーラー	浮子の付いた大きな2分割網の網抜き作業	軽労働化
放水銃	海上で網洗い	軽労働化
低燃費エンジン	省エネを考慮した漁船用エンジン	省エネ
低燃費プロペラ	キャビテーションが発生しにくいプロペラ	省エネ
バルバスバウ	造波抵抗の軽減	省エネ

取組記号 A 改革型漁船の導入のまとめ

船舶の推移

改革前			改革後	
船数 5隻	船齢	主な用途	船数 3隻	主な用途
			改革型本船	A漁場・B漁場網起し、各種作業
			改革型作業船	A漁場・B漁場台前船、C漁場網起し船。各種作業
本船	10年	A漁場・B漁場網起し、各種作業	網積み船	旧本船。網交換や各種作業
台前船	35年	A漁場・B漁場台前船、C漁場網起し船。各種作業	減船(廃船にするか売却するかは検討中)	
作業船 1	31年	網交換・漁期初末の作業		
作業船 2	33年	港での一時網置き場		
網積み船	36年	網交換作業		

人員構成の推移

年齢	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	計
改革前人員数	1人	0人	0人	8人	6人	15人
改革後人員数	1人	0人	0人	8人	5人	14人

燃油使用量の推移

改革前			改革後 計画使用量(参考資料2 25ページ)		
	燃油量	燃油金額		燃油量	燃油金額
			改革型本船	9,682ℓ	774千円
			改革型作業船	4,032ℓ	322千円
本船	9,277ℓ	881千円	網積み船	917ℓ	73千円
台前船	5,089ℓ	483千円	減船		
作業船	1,279ℓ	122千円			
作業船	0ℓ				
網積み船	0ℓ				
計	15,645ℓ	1,486千円※1		14,631ℓ	1,169千円※2

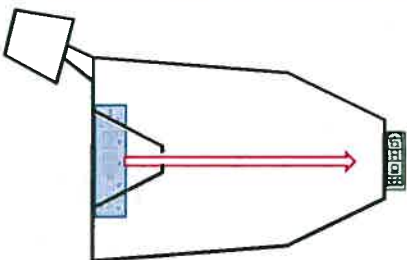


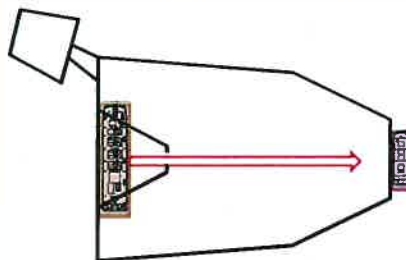


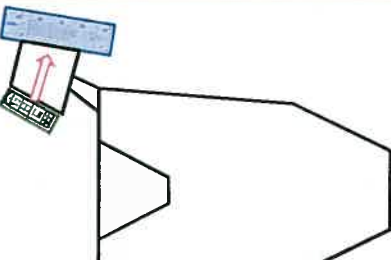


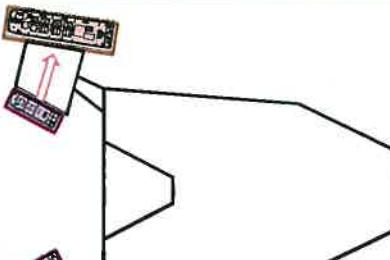


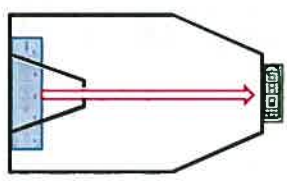


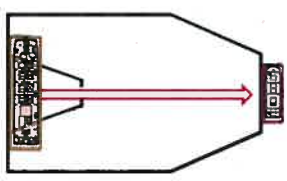


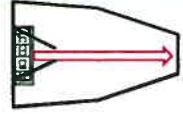

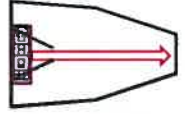

※1 過去3ヵ年の平均は95円/ℓ

※2 実勢価格73円/ℓの10%増し80円/ℓで算出








見込まれる効果

- 作業性の向上による省人化 15人⇒14人 人件費が4,733千円削減。
- 省エネ設備の導入と船団縮小(5隻⇒3隻)により燃油費が
15,645ℓ⇒14,631ℓ 1,486千円⇒1,169千円 となりそれぞれ 1,014ℓ、316千円削減。
- 甲板スペースが約30%増え、浮子付の大型漁具(取組B 11ページ)が積載可能となる。
- ネットホーラーが大型化され2枚割漁具(取組C 12ページ)の回収が可能となる。

網起しの人員配置と方法

	改革前	改革後
A漁場 箱網起し	 <p>  本船11人  台前船4人 環巻き方式にて本船が移動し網を起こす </p>	 <p>  改革型本船10人  改革型作業船4人 環巻き方式にて本船が移動し網を起こす </p>
A漁場 肘金庫網起し	 <p>  本船11人  台前船4人 手起しにて台前船が移動し網を起こす </p>	 <p>  改革型本船10人  改革型作業船4人 手起しにて改革型作業船が移動し網を起こす </p>
B漁場 箱網起し	 <p>  本船11人  台前船4人 環巻き方式にて本船が移動し網を起こす </p>	 <p>  改革型本船10人  改革型作業船4人 環巻き方式にて本船が移動し網を起こす </p>
C漁場 箱網起し	 <p>  台前船10人 手起しにて台前船が移動し単船で網を起こす </p>	 <p>  改革型作業船6人 環巻き方式を導入し、改革型作業船が移動し単船で網を起こす </p>

沖作業の人員配置

	改革前	改革後	備考
網交換・沖作業		 改革型本船 5人  改革型作業船 4人	改革型作業船の機動力と機械化の導入により、 潜水作業が不要となる
	 本船 3人	 網積み船(旧本船)5人	
	 台前船 3人	減船	
	 作業船 2人		
	 網積み船 2人		
	 潜水作業 5人	潜水作業は廃止	

取組記号 A 改革型漁船の導入のまとめ

現状の1日スケジュール

	網起し		沖作業(網交換や漁期初末の整備)
	冬季(11月中～7月中)	夏季(7月～11月中)	
5:00		↑ B漁場網起し 往復20分。箱網起し60分	
6:00	↑ A漁場 網起し 往復30分。箱網起し70分。	↓ C漁場網起し	網交換の時は網起しを行わずに作業に掛かる。
7:00	↓ 肘金庫起し20分	↑ 往復15分。箱網起し45分 水揚げ	
8:00	↑ B漁場網起し 往復20分。箱網起し60分。	↓ 漁具メンテナンス	沖作業には潜水が伴い、身体に負担が掛かるほかにも、船の作業性、漁具の構造が旧態依然であり時間が掛かる。
9:00	↓ 水揚げ		
10:00	↑ 漁具メンテナンス		
11:00			
12:00	平均すると約6時間で1日の作業は終了する。だが漁獲物が多い時や漁具メンテナンスの区切りによっては時間の増減は発生する。		
13:00			9時間の沖作業となり労働時間過多となっている。
14:00	季節によってはA漁場のみの網起しとなる。	季節によってはB漁場のみの網起しとなる。	

改革後の1日スケジュール

	網起し		沖作業(網交換や漁期初末の整備)
	冬季(11月中～7月中)	夏季(7月～11月中)	
5:00		↑ B漁場網起し 往復20分。箱網起し60分	
6:00	↑ A漁場 網起し 往復30分。箱網起し70分。	↓ C漁場網起し	現状通り、網交換の時は網起しを行わずに作業に掛かる。
7:00	↓ 肘金庫起し20分	↑ 往復15分。箱網起し25分 水揚げ	
8:00	↑ B漁場網起し 往復20分。箱網起し60分。	↓ 漁具メンテナンス	取組Aと後述の取組B・Cの効果により潜水作業が廃止されても沖作業は7.3時間で終了する見込みとなり、労働時間を抑えることが可能となる。
9:00	↓ 水揚げ		
10:00	↑ 漁具メンテナンス		
11:00			
12:00	B漁場の網起し後、一旦帰港しC漁場の網起しとB漁場の漁獲物選別作業に人員は分かれる。C漁場は環巻き方式導入により、網起し時間が20分短縮。季節によってはB漁場のみの網起しとなる。		
13:00	現状通り。季節によってはA漁場のみの網起しとなる。		

取組記号 B 合理的な漁具の導入(A漁場)

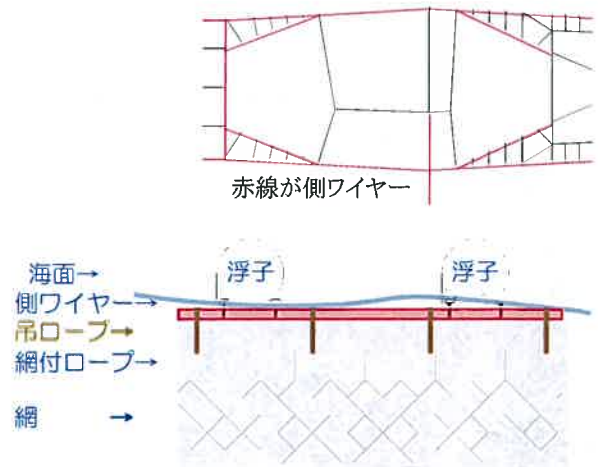
目的

- 網交換作業を安全簡易化する(登り運動場・第一箱網・第二箱網・肘金庫網)。
- 潜水作業無しでの網交換作業を補佐する。

○改革前

現状の側は主に金属ワイヤーで構成されていて、ワイヤーと網を沈めないうえに多数の大きな浮子を取り付けられている。

網には浮子を取り付けられていく、海水に沈むため、網入れ時には迅速な吊りロープの取り付けが必要。時化や急潮により吊りロープが切断した場合は網が海底に落ちてしまう。



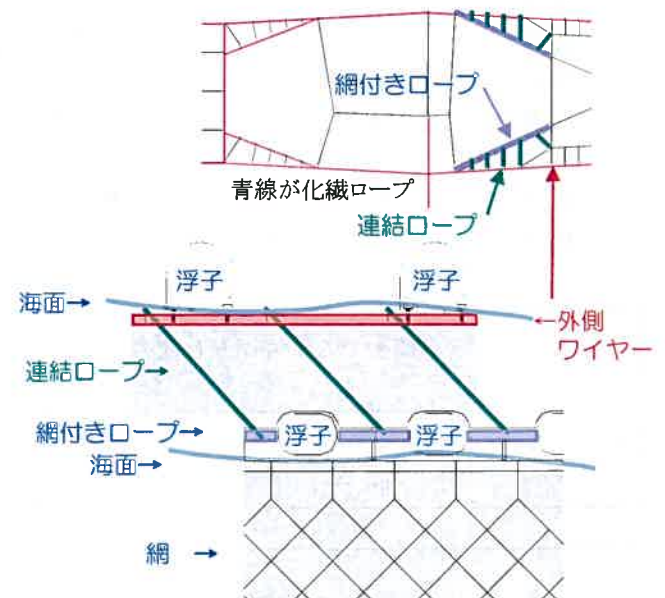
○改革後

側の中で張力のあまり掛からない部分(青線部)のワイヤーを取り外し、化繊の網付きロープで代用する。網付きロープには直接小型の浮子を取り付け、沈まない仕様とする。

網入れ時に浮子付き網は浮くため、改革型作業船(取組A-1)で船上に居ながら安全に落ち着いて、外側ワイヤー(赤線)と網付きロープ(青線)を連結ロープ(緑線)で縛り固定することが可能となる。時化や急潮により連結ロープが切断しても網は沈まない。

改革型本船の導入(取組A-2)により甲板スペースが拡大することと効率的な漁労機器により浮子を取り付けても回収・積載は可能となる。

登り運動場にはあわせて、網回収の軽労働化、網成り保持、資源保護の目的で網目の拡大した網を導入する。現在180mm目合⇒改革後240mm目合



導入コストの比較	改革前	改革後	
側素材	金属ワイヤー	化繊ロープ	220千円の減少
側浮子数	263個	188個	277千円の減少
網肩浮子数	0個	300個	462千円の増加
吊りロープ数	263本	188本	9千円の減少

計 44千円の減少

見込まれる効果

- 網交換の安全性・作業性の向上。
- 網交換時間(網入れ時間)の短縮(取組C 12ページに記載)。
- 側資材の導入コストが44千円削減される。
- 網目の拡大(180mm⇒240mm)により小型魚の漁獲が抑えられ、資源保護に繋がる。

取組記号 C 網分割箇所の変更(A漁場)

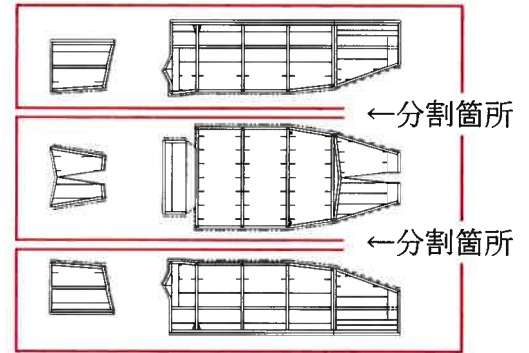
目的

- 多くの時間と手間が掛かる網交換作業の乗組員負担と作業時間の短縮を図る。

○改革前

本船の漁労機器のサイズと能力不足から網を3分割しないと回収できない。(第一・第二箱網)
3分割すると海上から網を船に取り込む際、3回の引き揚げ作業が必要となる。

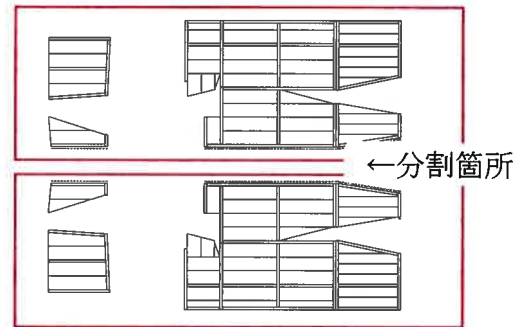
網入れの際には陸上で3分割した網を連結する必要がある。



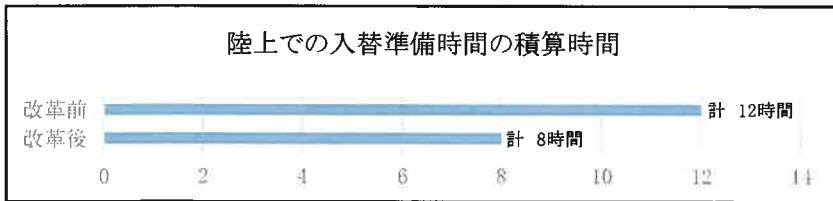
第一箱網の3分割図
(第二箱網もほぼ同じ)

○改革後

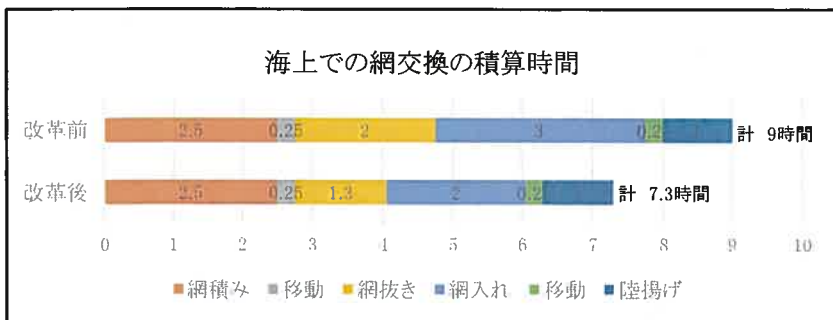
網の分割箇所を減らし、2分割に改革する(第一・第二箱網)。
陸上での結合作業、海上での分割作業は改革前2箇所であったが1箇所になるため、半分の時間で行える。
改革型本船の導入(取組A-2)により2分割の大きな網でも回収が可能となる。
海上から船へ網を取り込む作業は改革前の3回の引き揚げ作業から2回へと減少する。



第一箱網の2分割図
(第二箱網もほぼ同じ)



陸上での網合わせに掛かる時間が2/3となり
改革前12時間⇒改革後8時間で完了。
陸上での作業が4時間短縮。



海上での網抜き時間が
改革前2時間⇒改革後1.3時間で完了。
網入れ時間が
改革前3時間⇒改革後2時間*で完了。
※合理的な漁具(取組B)による効果

海上での作業が計1.7時間短縮。

見込まれる効果

- 作業負担の軽減。
- 網交換時間の短縮。
合理的な漁具の導入(取組B)に加え、分割箇所が2箇所から1箇所に、網揚げ時3回繰り返していた作業が2回に改革することにより網交換総時間が
改革前は陸上作業12時間+海上作業9時間=21時間
改革後は陸上作業8時間+海上作業7.3時間=15.3時間
21時間-15.3時間=5.7時間の短縮が図られる。
- 台風接近などの緊急時にも素早い網抜き効果を発揮できる。

取組記号 D 網交換サイクルの変更(A漁場)

目的

- 網交換は定置網の漁獲・保守のために重要な作業であり、各種リスクを軽減させる。

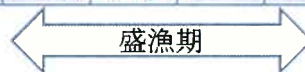
○改革前

	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
A漁場		網入	防藻加工網 使用時期			交換					網抜	休漁

漁期初めに防藻加工済みの網を使用し、漁期半ばまで使用。その後漁獲量の少ないタイミングで未加工の網と交換し漁期末まで使用。
作業負担の大きさから1年に1度の網交換となり、交換後は汚れの付着が早い網での作業が余儀なくされている(防藻加工は経費が掛かるため1枚のみ加工している)。

○改革後

	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
A漁場		網入		交換	防藻加工網 使用時期			交換			網抜	休漁



取組Aによる機械力の導入、甲板スペースの拡大。
取組Bによる安全性・作業性の向上。
取組B・Cによる網交換時間短縮の効果で作業が容易になることから、1年に2回の網交換を行う(第一・第二箱網)。

改革後は漁期初めに未加工の網を投入し、盛漁期前に防藻加工済みの網と交換する。盛漁期を過ぎると未加工の網と交換し漁期末まで使用する計画。
(防藻加工は改革前と同様に1枚のみ加工する)



汚れにより沈下した漁具

網が汚れると流水抵抗が増加し、漁具が沈んでしまうことがある。
箱網内の魚が逃げることによる漁獲量の低下や漁具破損事故の危険が高くなるため、定期的に漁具の入れ替えを行うことは定置網管理にとって大切なこととなる。

防藻加工費	改革前		改革後	
	加工日	加工費	加工日	計画加工費
登り運動場	漁期初め 網入れ前	2,089千円	網入れ前	2,089千円
第一箱網		1,961千円	1月の 網交換前	1,961千円
第二箱網		2,255千円		2,640千円*
肘金庫網				
計		6,305千円		6,690千円

※計画加工費は肘金庫網の増設分
(資料集15ページ)を見込む

見込まれる効果

- 網交換回数を増やし(1回⇒2回)、汚れた網で漁獲損失や事故の危険性を抑える。

改革後15.3時間×2回－改革前21時間×1回＝9.6時間増加するが、各種リスクの軽減を図る。

取組記号 E 網設置の効率化(A漁場)

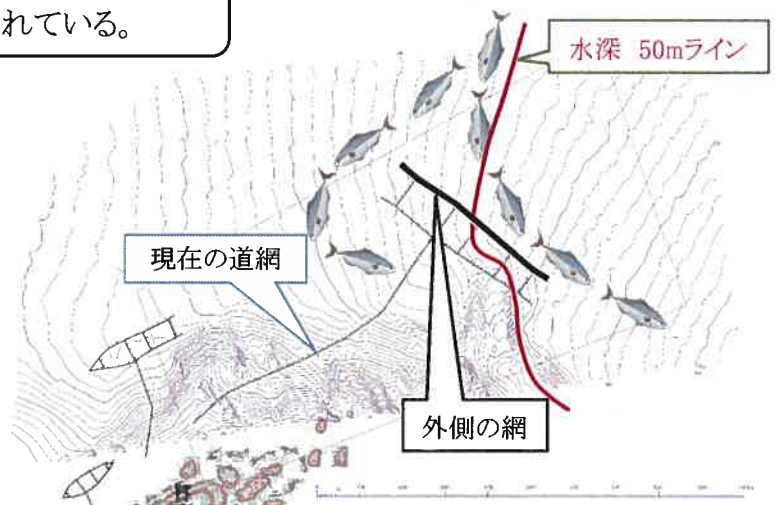
目的

- 漁場の沖を通過している魚群が確認されており、A漁場の現在の設置位置では獲り不足が懸念されている。

○改革前

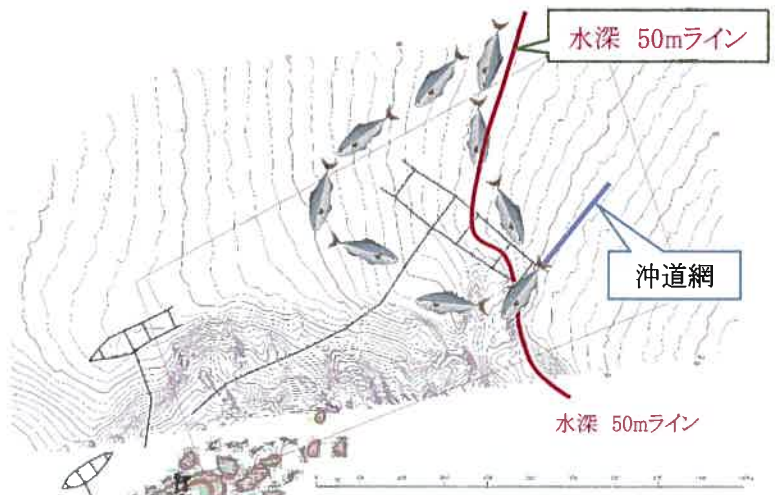
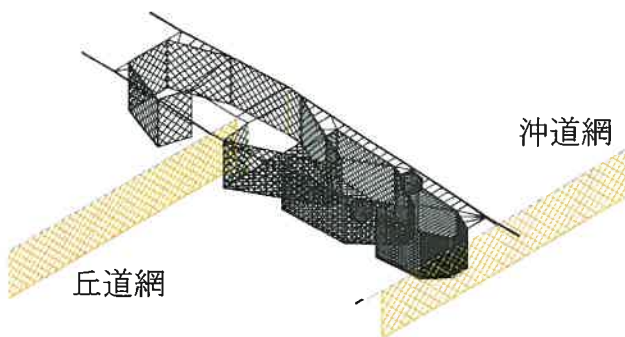
A漁場の本側は等深線に対し、垂直に位置している。そのため等深線に沿って来遊してくる魚群の多くは定置網の外側の網に当たり、沖を通過していくと予測される。

実際に魚群が沖を通過している状況を漁業者が多々確認している。



○改革後

沖へ向けた道網を導入し、漁場の沖を通過している魚群を網内へ誘導する。



現状の丘道網の遮断面積は約32,550㎡ 沖道網の予定遮断面積は約8,250㎡
道網の総遮断面積は約25%増加する。

1998年発刊 ていち第94号 沖垣網と魚の行動 井上喜洋 著 では
沖道網に遭遇した魚群の阻止効果は充分ある。

岸側へ向かう魚群の数が増えることは漁獲量に寄与する。

実際の漁獲に反映される量は、多くても全体漁獲量の10%以下だが 僅か150mの沖道網でも数%の漁獲が増やせるとある。

寒ブリを狙うことで有名な富山湾や佐渡の定置網では多くの漁場で沖道網を設置しており、漁獲向上策として昔から活用されている。

今計画では150m以上の沖道網設置を検討しているが、地域で初めての試みとなることを考慮し、年間漁獲量の5%増加を見込む。

見込まれる効果

- A漁場の平均水揚量406.8t※×5%=20.3tの水揚量増加。
20.3t×A漁場の平均単価300円/kg※=6,090千円の水揚高増加。

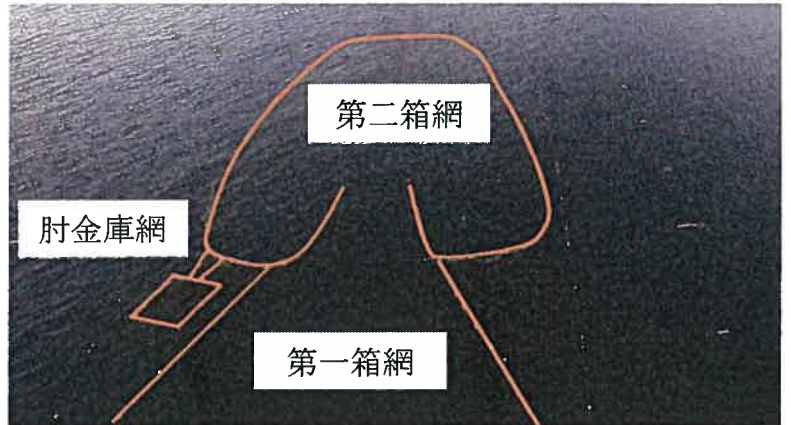
※平成22～26年度の5年中3年平均 参考資料27ページに記載

目的

- 多くが肘金庫で漁獲されるブリは大漁時に「スレ」が発生してしまう。見た目が悪くなり、単価下落の原因となっているため、「スレ」ブリの発生を抑える。

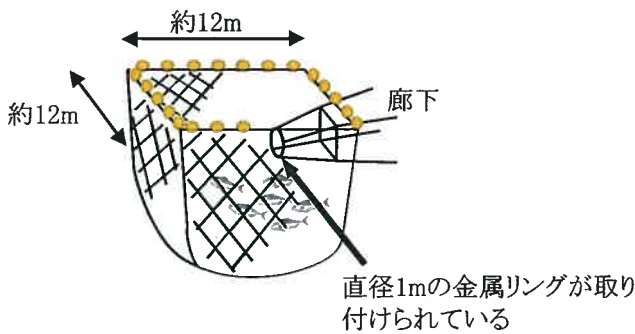
○改革前

- 選別漁獲(主にブリ類)や出荷調整の目的で第二箱網の沖側に肘金庫網と呼ぶ生簀状の網を設置してある。
- 大量に肘金庫網に魚が入網すると魚同士が接触し、魚体にスレが発生してしまう。
- ブリは1日に大量に水揚げすると単価が下落する。そのため現状でも出荷調整を行っているが、肘金庫網の容量が小さいため調整には限界がある。



1日当りのブリの水揚げ本数	1~2000本	2000本以上
単価	290円	193円

肘金庫網の概略図



- 肘金庫網は第二箱網からトンネル状の廊下網で繋がっており、第二箱網内を游泳する魚が入りやすい位置に取り付けられている。
- 入り口のサイズが小さい(直径1mの金属リング)ため入った魚は出難い構造となっている。

平成26年度の「スレ」ブリ実績

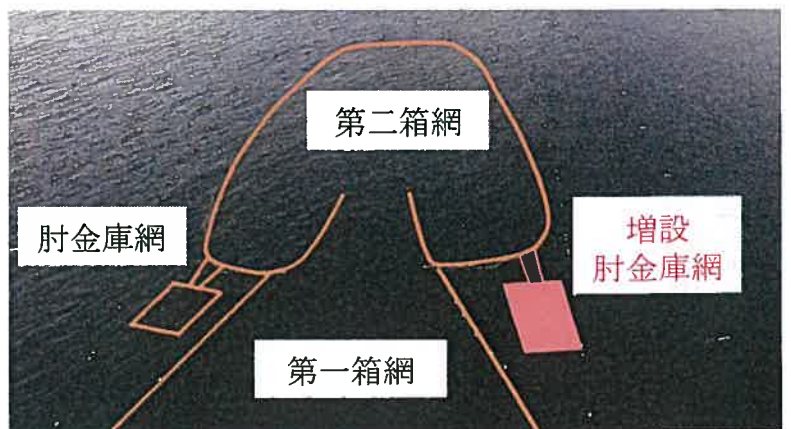
	総本数	状態	スレ本数
4月15日	1756	スレ	152
4月23日	1202	スレ	48
5月6日	1221	スレ	112
5月8日	3135	スレ	243
5月11日	2565	スレ	526
		大スレ	140
5月12日	1026	スレ	434
		大スレ	140
5月13日	1000	スレ	40
6月14日	925	スレ	178

金庫網の容積約1,300m³中に1,600本のブリ(H26年度の平均本数)が入網すると、1本あたりの遊泳スペースは約0.8m³となり魚体が擦れる原因となっている。

○改革後

- 丘側にも増設し、更なる選別漁獲・出荷調整に取り組む。
- 2箇所で行分けを行うことで魚体のスレを抑える。肘金庫内の魚密度が 0.8m³/1本 ⇒ 1.6m³/1本 となりスレ発生が軽減される。

上記対策を実行しても発生する「スレ」ブリについては後述の20ページ 販路拡大②で対策。



見込まれる効果

- ブリ類の魚体のスレを抑え、「スレ」ブリの発生を抑える。
- ブリの単価保持が期待出来る。
- 選別作業負担の軽減。

目合い拡大(取組B)・連続20日間休漁の継続実施を行い資源保護に取り組む。

漁場	改革前	改革後	効果
A漁場 B漁場 C漁場	20日以上 の休漁期間 の実施。	網目合いの 拡大。 20日以上 の休漁期間 の継続実施。 和歌山県 資源管指針 を遵守。	小型魚漁獲 の抑制。 資源保護に 繋げる。

和歌山県資源管理指針

- 公的管理措置を遵守するほか、持続的生産を達成するため、自主的措置として下記の措置を重点的に取り組む。
⇒休漁
- 資源水準の低下が顕著となっているクロマグロを対象として強度の資源管理に取り組む。
⇒小型魚(30kg未満)の漁獲数量規制

漁獲状況 平成22～26年の5中3平均	
クロマグロ幼魚	115本 352kg

太地定置ではクロマグロ幼魚の平均漁獲量は少なく、資源管理に取り組んでも水揚げ高への影響は少ないと考えられる。

漁業者は、休漁期間中も含め、種苗放流や漁場整備等の取組に積極的に参加し、資源の増大に努めるとともに、水質の保全、藻場及び干潟の保全及び造成、森林の保全及び整備等により漁場環境の改善にも取り組む。

年間の操業スケジュール

漁獲期間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
A漁場	漁獲期間						休漁期間					
B漁場	休漁期間						漁獲期間					
C漁場	休漁期間						漁獲期間					

○現状と改革後の年齢構成

年齢	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	計
改革前人員数	1人	0人	0人	8人	6人	15人
改革後人員数	1人	0人	0人	8人	5人	14人

- 定置網乗組員の平均年齢は45歳であり、将来の乗組員確保が懸念される。また他業種からの転職者が多く、網保守技術の低迷が危惧されている。今後の就業者は20～30歳代を中心とし、公募による採用を実施している。

○改革後

- 中高生の体験学習を受け入れ(2回/年)、将来的に若い人材の確保を期待する。
- 定置網漁業者OBによる技術指導を実施し(6回/年)、乗組員の技術向上を図る。
- 有望な若手乗組員に対しては、外部の研修機関と連携し教育・研修を実施する。
- 公募による採用の継続実施。

OBによる網保守技術指導



安全講習会



操業に関する講習会



見込まれる効果

- これまで外部発注していた補修作業を、自ら行えるように定置網技術を継承する。
- 将来的には修繕費の削減が可能となる。

取組記号 I 販路の拡大

道の駅たいじ(仮称)を利用した販路拡大

道の駅たいじ 計画パース図

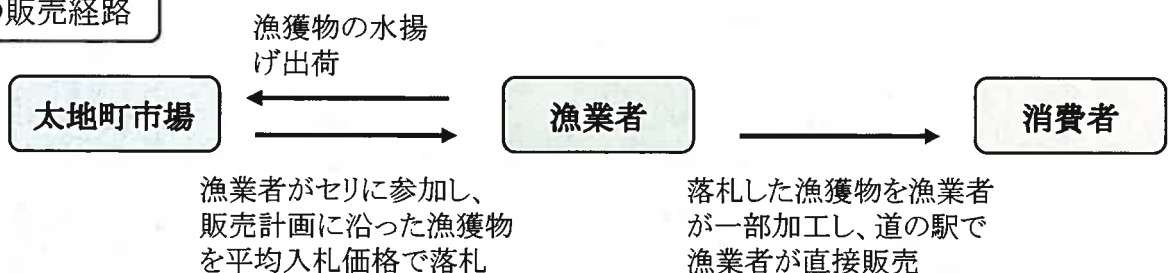


○太地町の『森浦湾鯨の海構想』(参考資料1 24ページ)に組み込まれている道の駅たいじ(仮称)が平成29年3月にオープン予定となっている。

太地町漁業協同組合が道の駅指定管理者に応募し、地場水産物を使用した食堂や直売所を運営する予定である。

太地町は、道の駅の来場者を年間27万人見込んでおり、魚価向上や魚食の普及に繋げる計画である。

今計画での販売経路



見込まれる効果

- これまで仲買人に落札され地域外へ展開されていた定置網の漁獲物を、地域にも流通させることが可能となる。(仲買人とは流通展開先が異なるため、住み分けが可能となり、お互いに共存関係を築ける)
- 漁業者もセリに参加することにより、セリが活気付く。

取組記号 I 販路の拡大①

○道の駅での漁獲物の販売

年間販売計画に沿って漁獲物の一部を道の駅での販売用として市場のセリに漁業者が参加し買い付ける。

約30kg/1日を目安として年間販売計画※を作成。

年間7,240kgの魚を落札。
(過去の平均3年の平均入札価格で2,722千円)

※詳細は参考資料3 26ページに記載

道の駅で漁業者が直接販売。

ブリ・サワラは確保量の半分を丸のまま販売、半分を切り身として販売する。その他の魚は丸のままトレーに積み、鮮魚として販売する。

魚の販売価格は、従前より販売実績のある太地町漁協直営スーパーの価格と同程度で販売予定。

歩留りを考慮した実質販売量6,860kg、売上金額 7,768千円(計画)

年間販売計画まとめ							
魚種	確保量 kg	落札金額 円	歩留り	販売量 kg	売上額 円	売上金額-落札金額	
サワラ 丸	450	405,000	100%	450	1,215,000	810,000	
サワラ 切り身	450	405,000	60%	270	972,000	567,000	
ブリ 丸	400	155,000	100%	400	465,000	310,000	
ブリ 切り身	400	155,000	50%	200	310,000	155,000	
アオリイカ	240	204,000	100%	240	612,000	408,000	
アジ	1,850	730,000	100%	1,850	2,190,000	1,460,000	
イワシ	700	63,000	100%	700	189,000	126,000	
カマス	300	50,000	100%	300	150,000	100,000	
サバ	1,450	213,500	100%	1,450	640,500	427,000	
スルメイカ	700	221,500	100%	700	664,500	443,000	
ムツ	300	120,000	100%	300	360,000	240,000	
総計	7,240	2,722,000		6,860	7,768,000	5,046,000	

市場での平均入札価格より5,046千円増額となる。

年間販売計画は消費者の需要に応じて柔軟に見直しを図る予定。

経費 計4,537千円

※詳細は参考資料3 26ページに記載

販売経費まとめ		
トレー費	382,112	300g入りトレー-23,882枚×16円(パーチも含む)
輸送費	13,554	往復3.6km×251日÷燃費10km/ℓ×単価150円/ℓ
人件費	3,000,000	パック詰め、加工の人件費(パート2名)
その他の経費	250,000	シール・チラシ・のぼり旗など
手数料	891,800	道の駅委託料金 売上額×10%
経費計	4,537,466	

経費は販路の拡大② P.20分も含む

収入 5,046千円 - 経費 4,537千円 = 利益 509千円

見込まれる効果

- 地元住民や近隣地域、観光で訪れた方々に新鮮で低価格な魚を提供できる。
- 道の駅での直接販売により5,046千円の収入増加。4,537千円の販売経費増加。

「スレ」ブリの活用

○改革前

- ブリの大漁捕獲時(3~5月に多い)には魚体同士の擦れによる、「スレ」ブリが水揚げされる。「スレ」ブリは見た目が悪く、B級品として評価されてしまう。
「スレ」ブリの漁獲量は平均 7,860kg/年 入札価格は91.7円/kgと非常に安い。

	数量(kg)	金額(千円)	平均単価
総水揚	302,857	102,671	339
通常品	294,996	101,950	345.6
スレブリ	7,860	720	91.7
スレブリ比率	2.6%	1.6%	

○改革後

- 3~5月の「スレ」ブリ大漁時に一次加工して道の駅で販売する。

「スレ」ブリは見た目の悪さだけであり、肉質にはまったく問題は無いため、一次加工(切り身として販売)を行い、特売品として通常品質ブリの切り身販売計画価格(1,600円/kg)の25%オフ(1,200円/kg)で販売する。

買い付け量は年間販売計画に沿って2,300kg(歩留りを考慮した重量は半分の1,150kg)。

通常品質ブリ切り身価格1,600円/kg × (100% - 25%) = 1,200円/kg

数量 1,150 kg(歩留まり50%) × 単価1,200円/kg = 1,380千円の売上額。

※詳細は参考資料3 26ページに記載

魚種	確保量	市場単価	落札金額	歩留り	販売量	販売単価	売上額	売上額-落札金額
スレブリ 切り身	2,300kg	91円	209,300円	50%	1,150kg	1,200円/kg	1,380,000円	1,170,700円

「スレ」ブリの市場での落札価格は 2,300kg × 91円/kg = 209,300円
市場での入札価格より
売上額1,380千円 - 落札価格209千円 = 1,171千円増額となる。

経費については前項19ページの中に含む。

見込まれる効果

- スレブリを適正価格で販売することが可能となる。
- 道の駅での販売により1,171千円の収入増加。

太地町ふるさと納税推進事業への参画

○改革前

太地町は、現在ふるさと納税(寄附)記念品として5,000円以上の寄附をしていただいた寄附者に対して記念品を贈呈している。

⇒記念品の種類が3種類と少なく、平成28年度より記念品拡充に向けたふるさと納税推進事業を実施し、記念品を町内業者から募集している。



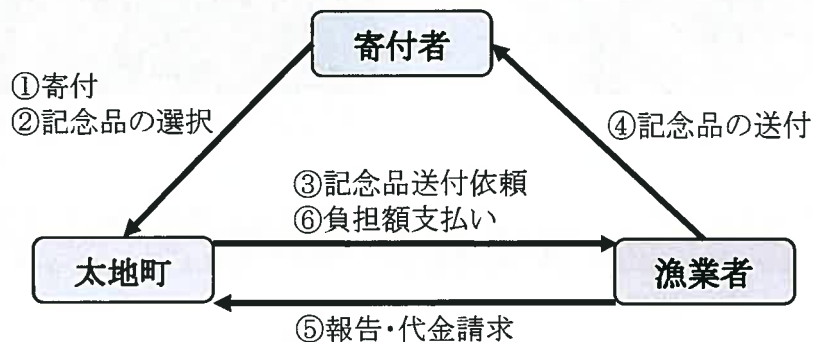
現在のふるさと納税記念品 3種

○改革後

- ふるさと納税推進事業に参加し、太地の定置網で水揚げされた鮮魚を取り扱ってもらう。(定置網組織が申請し決定予定)
- 太地の定置網で水揚げされる季節ごとの鮮魚を漁業者が直接寄附者に送付する。



太地の定置網で水揚げされた鮮魚



見込まれる効果

- 定置網で水揚げされる鮮度抜群の魚を寄附者に送付できる。
- 太地町を訪れたことのない方々に太地町太地定置網の魚を消費してもらえる。
- 口コミが広がることやリピーターが増えることにより、寄附者の増加に繋がる。

「本気の朝市」等 地域イベントへの参加・PR

○改革前

- 太地の朝市実行委員会による「本気の朝市」(年3~4回開催)の中での、太地漁協の「セリ市」で定置網の朝獲り鮮魚を漁業者が販売している。
- 地元中学生が朝市に参加し、フィッシュバーガー販売を実施。
- 地元住民及び紀南地方在住の人が多く来場している。
- 朝市開催前日に周辺宿泊施設にビラ配りをして観光客の集客を図っている。

○改革後

- 「本気の朝市」の開催場所を道の駅イベント広場に誘致する。
⇒太地町観光の特徴は、立ち寄り型観光客が多いため、国道42号沿いという立地を活かし、観光客をとりこむ。
- 「本気の朝市」に漁業者が継続参加する。
- 地元中学生の販売するフィッシュバーガーへの材料提供を行う。
- 開催日をメディア経由で広報し、記事として集客につなげる。



セリ市の様子



中学生によるフィッシュバーガーの販売

見込まれる効果

- 道の駅の整備予定地は交通量の多い国道42号沿いであり、観光客と地元住民および近隣地区の来場者数増加が見込める。
⇒太地定置の新鮮な魚の認知度アップ・消費増加に繋がる。
⇒売上の増加が期待出来る。
- 中学生の地元水産物に対する認識向上が図れる。
- 漁業者・加工業者・仲買人が地域の漁業について再考するきっかけとなり、地域関係者が一体となり取組める。

優良衛生品質管理市場のPR

○改革前

- 太地町は、平成20年度に高度衛生管理型荷捌き施設を整備し、太地町漁協が指定管理を受け、施設運営を行っている。
- 太地町漁業協同組合地方卸売市場は、全国に11ヶ所だけ認定されている優良衛生品質管理市場・漁港であるが広く認知されていない。(優良衛生品質管理市場・漁港とは大日本水産会が認定しており、現在全国に11箇所だけ認定されている)

○改革後

取組1 太地町漁協の取組

- 道の駅での販売や「本気の朝市」では、優良衛生品質管理市場 太地町漁協を明記した、のぼり旗等を作成し、安全性や品質をアピールする。
- ポスターを作成し、JR太地駅・金融機関等の目立つところに貼る。

取組2 定置漁業者の取組

- 太地定置網の漁獲物であることを示すタグやシール等を取り付ける。
タグやシールには「太地大敷」と明記する。



岸壁側から見た荷捌き施設概観



定置漁船の陸揚げ(選別は施設内で作業)



ステンレス製の選別台



プラスチック製パレットの上に陳列された魚箱

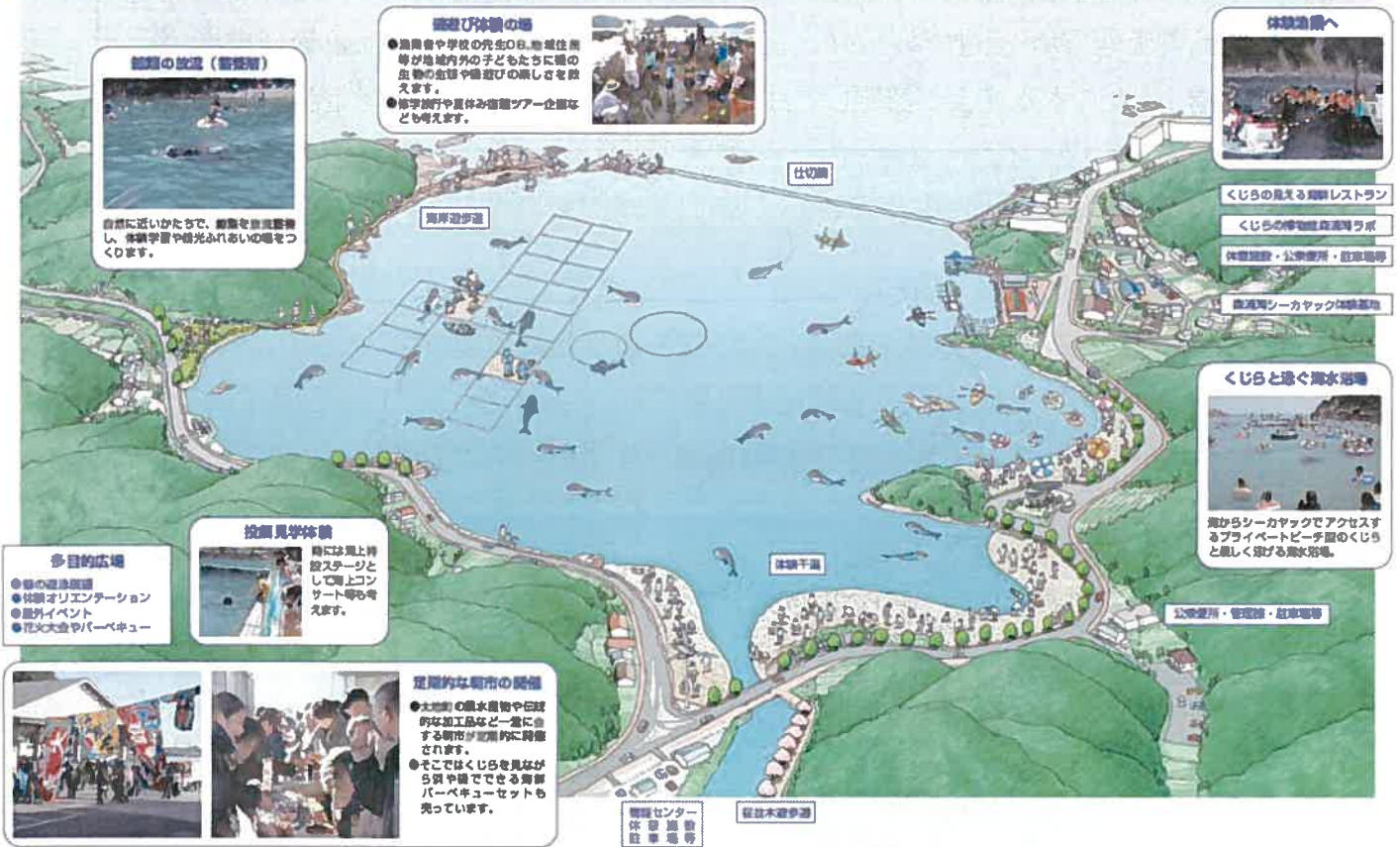
見込まれる効果

- 衛生管理の行き届いた市場で水揚げ、出荷されたことがわかるため、消費者が安心して商品を購入出来る。
- 消費者が陳列されている商品を見たときに、太地産であることが見た目で見える。
⇒太地産漁獲物の認知度アップ

太地町で策定している『森浦湾鯨の海構想』は、あるがままの豊かで美しい自然環境を大切にしつつ、太地の先達から今に受け継ぐ「くじら」を最大限に活かした国際的意義と地域振興の達成を目的としたプロジェクトである。
地域の発展に寄与するため、漁協・漁業者が地域と一体となり継続参加していく。

森浦湾くじらの海を基地とした、活力ある自然とくじらのまちづくり将来構想図

一鯨を愛で、育て、活かし、共に歩み、共に学ぶ一



■太地町くじらの海計画 全体スケジュール案

2015.03.30

工種	エリア	種別	短期		中期		長期	備考
			平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成31年度	
1. 道の駅 基本設計	B	施設基本設計	開始					道の駅及び地域振興施設整備に係る全体事業。国交省及び農林水産省事業を併用して整備する。基本設計、実施設計と併行して運営組織体制の検討と構築を図る。
2. 道の駅 実施設計	B	施設実施設計		開始				
3. 道の駅 地域振興施設 新築工事	B	道の駅(農プロ) 地域振興施設他			供用開始			県道整備、町の見晴らし台整備エリアとの関連性が強く、アクセス歩道を整備することにより森浦湾とつながる計画
4. 国道42号基盤整備事業	B	線形改良工事、道の駅(国交省)			供用開始			
5. 県道岸整備事業	B	護岸階段、スロープ、転落防止柵他			供用開始			町有地 見晴らし台等と合わせて計画
6. 見晴らし台等町有地整備事業	B	見晴らし台、駐車場、バス停設計・工事			供用開始			
7. 湾奥干潟造成・明神浜養浜事業	B	干潟造成、養浜(農プロ)			開始			道の駅の地域振興施設整備工事に継続して造成、養浜工事関係事業に着手する
8. 鯨類生質設置・飼育事業	C	鯨類飼育環境整備			開始			
9. 鯨類仕切り網設置・飼育事業	C	鯨類飼育環境整備			開始			仕切り網の設置から森浦湾内の鯨類放流個體が本格的に開始される為、目標年に合わせて着工時期は前後する
10. 未利用寄居舎の利活用事業	A	未利用資源活用			開始			
11. 旧三幸漁業及び周辺の敷地利用計画	A	未利用資源活用			計画・基本設計・実施設計等			旧三幸漁業跡地周辺及び海面を一体的に活用する計画。ソフト事業の安定的な運営を確認しながらニーズを把握する必要がある
12. 新防災・避難路整備計画、実施事業	全体	その他			計画・基本設計・実施設計・事業実施等			
13. マスタープランの継続的な見直しと再構築	全体	その他			全体の事業内容、進捗と併行して随時調査			全体の事業内容や事業期間を調整・管理すると共に、くじらの海計画を構成する基本理念を確認しつつ全体事業を進めるものとする

改革型本船の計画燃料消費量(網起し分)

	操業	回転数	所用時間	年間日数	年稼働時	燃油消費量	
						L/時間	L/年間
パターン1	A漁場まで	1,825	15分	120日	30.0h	40L	1,200L
	網起し	825	60分	120日	120.0h	10L	1,200L
	帰港	1,825	15分	120日	30.0h	40L	1,200L
	計				270.0h		4,500L
パターン2	A漁場まで	1,825	15分	20日	5.0h	40L	200L
	網起し	825	60分	20日	20.0h	10L	200L
	B漁場まで	1,825	3分	20日	1.0h	40L	40L
	網起し	825	40分	20日	13.3h	10L	133L
	帰港	1,825	12分	20日	4.0h	40L	160L
計				58.3h		883L	
パターン3、4	B漁場まで	1,825	12分	80日	16.0h	40L	640L
	網起し	825	40分	80日	53.3h	10L	533L
	帰港	1,825	12分	80日	16.0h	40L	640L
	荷揚げ	825	45分	80日	60.0h	10L	600L
	計				145.3h		2,413L
総計					473.7h		7,796L

改革型作業船の計画燃料消費量(網起し分)

	操業	回転数	所用時間	年間日数	年稼働時	燃油消費量	
						L/時間	L/年間
パターン1	A漁場まで	2,285	15分	120日	30.0h	18L	540L
	網起し	1,225	60分	120日	120.0h	5L	600L
	帰港	2,285	15分	120日	30.0h	18L	540L
	計				180.0h		1,680L
パターン2	A漁場まで	2,285	15分	20日	5.0h	18L	90L
	網起し	1,225	60分	20日	20.0h	5L	100L
	B漁場まで	2,285	3分	20日	1.0h	18L	18L
	網起し	1,225	40分	20日	13.3h	5L	67L
	帰港	2,285	12分	20日	4.0h	18L	72L
計				43.3h		347L	
パターン3	B漁場まで	2,285	12分	8日	1.6h	18L	29L
	網起し	1,225	40分	8日	5.3h	5L	27L
	帰港	2,285	12分	8日	1.6h	18L	29L
	計				8.5h		85L
パターン4	B漁場まで	2,285	12分	72日	14.4h	18L	259L
	網起し	1,225	40分	72日	48.0h	5L	240L
	C漁場まで	2,285	2分	72日	2.4h	18L	43L
	網起し	1,225	25分	72日	30.0h	5L	150L
	帰港	2,285	10分	72日	12.0h	18L	216L
	荷揚げ	1,125	15分	72日	18.0h	5L	90L
計				124.8h		998L	
総計					356.7h		3,110L

改革型本船の計画燃料消費量
(漁期初め・末の沖作業+網交換作業)

	操業	回転数	所用時間	年間日数	年稼働時	燃油消費量	
						L/時間	L/年間
A漁場	A漁場まで	1,825	15分	17日	4.3h	40L	170L
	沖作業	825	360分	14日	84.0h	10L	840L
	網交換	825	360分	3日	18.0h	10L	180L
	帰港	1,825	15分	17日	4.3h	40L	170L
	計				110.5h		1,360L
B漁場	B漁場まで	1,825	12分	5日	1.0h	40L	40L
	沖作業	825	360分	2日	12.0h	10L	120L
	網交換	825	360分	3日	18.0h	10L	180L
	帰港	1,825	12分	5日	1.0h	40L	40L
	計				32.0h		380L
C漁場	C漁場まで	1,825	10分	2日	.3h	40L	13L
	沖作業	825	360分	2日	12.0h	10L	120L
	帰港	1,825	10分	2日	.3h	40L	13L
	計				12.7h		146L
総計					155.2h		1,886L

改革型本船の計画燃料使用量 628.8h 9,682L

改革型作業船の計画燃料消費量
(漁期初め・末の沖作業+網交換作業)

	操業	回転数	所用時間	年間日数	年稼働時	燃油消費量	
						L/時間	L/年間
A漁場	A漁場まで	2,285	15分	17日	4.3h	18L	77L
	沖作業	1,225	360分	14日	84.0h	5L	420L
	網交換	1,225	360分	3日	18.0h	5L	90L
	帰港	2,285	15分	17日	4.3h	18L	77L
	計				110.5h		664L
B漁場	B漁場まで	2,285	12分	5日	1.0h	18L	18L
	沖作業	1,225	360分	2日	12.0h	5L	60L
	網交換	1,225	360分	3日	18.0h	5L	90L
	帰港	2,285	12分	5日	1.0h	18L	18L
	計				32.0h		186L
C漁場	C漁場まで	2,285	10分	2日	.3h	18L	6L
	沖作業	1,225	360分	2日	12.0h	5L	60L
	帰港	2,285	10分	2日	.3h	18L	6L
	計				12.7h		72L
総計					155.2h		922L

改革型作業船の計画燃料使用量 511.8h 4,032L

網積み船の計画燃料消費量
(漁期初め・末の沖作業+網交換作業)

	操業	回転数	所用時間	年間日数	年稼働時	燃油消費量	
						L/時間	L/年間
A漁場	A漁場まで	2,000	15分	8日	2.0h	40L	80L
	沖作業	900	360分	5日	30.0h	11L	330L
	網交換	900	360分	3日	18.0h	11L	198L
	帰港	2,000	15分	8日	2.0h	40L	80L
	計				52.0h		688L
B漁場	B漁場まで	2,000	12分	4日	.8h	40L	32L
	沖作業	900	180分	2日	6.0h	11L	66L
	網交換	900	180分	3日	9.0h	11L	99L
	帰港	2,000	12分	4日	.8h	40L	32L
	計				16.6h		229L
総計					68.6h		917L

網積み船の計画燃料消費量 68.6h 917L

道の駅 販売計画表

月	魚種	確保量	落札単価	市場金額	販売量	販売単価	売上額	売上利益	トレー数
1月 20日販売	サバ	150	200	30,000	150	600	90,000	60,000	500
	スルメイカ	150	260	39,000	150	780	117,000	78,000	500
	アジ	150	500	75,000	150	1,500	225,000	150,000	500
	アオリイカ	80	750	60,000	80	2,250	180,000	120,000	267
	計	530		204,000	530		612,000	408,000	1,767
2月 20日販売	サバ	150	200	30,000	150	600	90,000	60,000	500
	スルメイカ	150	250	37,500	150	750	112,500	75,000	500
	アジ	150	600	90,000	150	1,800	270,000	180,000	500
	アオリイカ	80	800	64,000	80	2,400	192,000	128,000	267
	計	530		221,500	530		664,500	443,000	1,767
3月 23日販売	サバ	150	200	30,000	150	600	90,000	60,000	500
	スルメイカ	100	250	25,000	100	750	75,000	50,000	334
	アジ	100	300	30,000	100	900	90,000	60,000	334
	ブリ	100	500	50,000	100	1,500	150,000	100,000	0
	計	1,250		248,700	850		925,000	676,300	2,502
4月 20日販売	サバ	100	150	15,000	100	450	45,000	30,000	334
	アジ	200	300	60,000	200	900	180,000	120,000	667
	ブリ	150	400	60,000	150	1,200	180,000	120,000	0
	ブリ切	150	400	60,000	75	1,600	120,000	60,000	250
	計	1,700		567,800	1,165		1,815,000	1,247,200	2,885
5月 20日販売	サバ	100	100	10,000	100	300	30,000	20,000	334
	アジ	200	500	100,000	200	1,500	300,000	200,000	667
	ブリ	150	300	45,000	150	900	135,000	90,000	0
	ブリ切	150	300	45,000	75	1,200	90,000	45,000	250
	計	1,550		422,800	1,045		1,440,000	1,017,200	2,735
6月 19日販売	サバ	100	100	10,000	100	300	30,000	20,000	334
	アジ	200	400	80,000	200	1,200	240,000	160,000	667
	サワラ	75	800	60,000	75	2,400	180,000	120,000	0
	サワラ切	75	800	60,000	45	3,200	144,000	84,000	150
	計	450		210,000	420		594,000	394,000	1,151
7月 21日販売	サバ	100	80	8,000	100	240	24,000	16,000	334
	イワシ	100	90	9,000	100	270	27,000	19,000	334
	アジ	150	300	45,000	150	900	135,000	90,000	500
	サワラ	50	600	30,000	50	1,800	90,000	60,000	0
	計	450		122,000	430		348,000	226,000	1,268

月	魚種	確保量	落札単価	市場金額	販売量	販売単価	売上額	売上利益	トレー数
8月 21日販売	サバ	100	80	8,000	100	240	24,000	16,000	334
	カマス	100	200	20,000	100	600	60,000	40,000	334
	イワシ	150	90	13,500	150	270	40,500	27,000	500
	アジ	150	300	45,000	150	900	135,000	90,000	500
	計	600		126,500	600	1,200	379,500	253,000	2,002
9月 23日販売	サバ	100	100	10,000	100	300	30,000	20,000	334
	カマス	100	150	15,000	100	450	45,000	30,000	334
	イワシ	150	90	13,500	150	270	40,500	27,000	500
	アジ	150	300	45,000	150	900	135,000	90,000	500
	計	600		123,500	600	1,200	370,500	247,000	2,002
10月 18日販売	サバ	100	100	10,000	100	300	30,000	20,000	334
	カマス	100	150	15,000	100	450	45,000	30,000	334
	イワシ	150	90	13,500	150	270	40,500	27,000	500
	アジ	150	400	60,000	150	1,200	180,000	120,000	500
	計	600		138,500	600	1,200	415,500	277,000	2,002
11月 22日販売	サバ	150	150	22,500	150	450	67,500	45,000	500
	スルメイカ	150	400	60,000	150	1,200	180,000	120,000	500
	イワシ	150	90	13,500	150	270	40,500	27,000	500
	アジ	150	400	60,000	150	1,200	180,000	120,000	500
	計	700		256,000	680	4,000	738,000	482,000	2,100
12月 24日販売	サバ	150	200	30,000	150	600	90,000	60,000	500
	スルメイカ	150	400	60,000	150	1,200	180,000	120,000	500
	アジ	100	400	40,000	100	1,200	120,000	80,000	334
	アオリイカ	80	1,000	80,000	80	3,000	240,000	160,000	267
	計	580		290,000	560	3,200	846,000	556,000	1,701
年間合計	魚種	仕入数量	市場価格	販売量	売上額	売上利益	トレー数		
	鮮魚	7,240	2,722,000	6,860	7,768,000	5,046,000	20,047		
	スレブリ	2,300	209,300	1,150	1,380,000	1,170,700	3,835		
	合計	9,540	2,929,000	8,010	9,148,000	6,219,000	23,882		

丸のままの販売する魚は100%の重量×単価で販売

歩留り(頭や骨を除いた販売量)

ブリ切	50%	ブリ・サワラは仕入量の50%を丸、50%を切り身で販売
サワラ切	60%	
スレブリ	50%	全量切り身で販売

道の駅販売計画 年間まとめ

○収入

魚種	確保量 kg	落札金額 円	販売量 kg	売上額 円	売上額-落札金額	資料集
スレブリ	2,300	209,300	1,150	1,380,000	1,170,700	18ページ参照
サワラ	450	405,000	450	1,215,000	810,000	17ページ参照
サワラ 切り身	450	405,000	270	972,000	567,000	
ブリ	400	155,000	400	465,000	310,000	
ブリ 切り身	400	155,000	200	310,000	155,000	
アオリイカ	240	204,000	240	612,000	408,000	
アジ	1,850	730,000	1,850	2,190,000	1,460,000	
イワシ	700	63,000	700	189,000	126,000	
カマス	300	50,000	300	150,000	100,000	
サバ	1,450	213,500	1,450	640,500	427,000	
スルメイカ	700	221,500	700	664,500	443,000	
ムツ	300	120,000	300	360,000	240,000	
総計	9,540	2,929,000	8,010	9,148,000	6,216,700	

○経費

トレー費	382,112	300g入りトレー23,882枚×16円(パーチも含む)
輸送費	13,554	往復3.6km×251日÷燃費10km/ℓ×単価150円/ℓ
人件費	3,000,000	パック詰め、加工の人件費
その他の経費	250,000	シール・チラシ・のぼり旗など
手数料	891,800	道の駅委託料金 売上額×10%
経費計	4,537,466	

収入	-	経費	=	増加額
6,216,700	-	4,537,466	=	1,679,234

参考資料4

太地地区の漁獲魚種

太地定置の主な漁獲物の漁期(平成22~26年度の5年中3年平均)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
ブリ			▲	▲								
ワラサ					▲							
ハマチ												
アジ・サバ・イワシ												
アオリイカ												
スルメイカ												
赤イカ												
タチウオ												
ムツ												
サワラ												
サゴシ												
イシダイ												
ソウダガツオ												
カツオ類												
イサキ												
タイ												
トビウオ												
ハギ類												

※カツオ類はハガツオ・スマガツオ・本カツオを含む。 ※ハギ類はニザダイ・ウマズラハギ・ウスバハギを含む
 ※ソウダガツオにはヒラソウダ・マルソウダを含む。 ▲ は「スレ」ブリが多く出る時期

太地定置の水揚量と水揚高(平成22~26年度の5年中3年平均)

魚種	A漁場		B漁場		C漁場		計	
	数量 kg	金額 円	数量 kg	金額 円	数量 kg	金額 円	数量 kg	金額 円
鰯	182662.8	63,067,602	5141.7	1,614,835	422.6	352,044	188227.1	65,034,482
鯖	20603.5	21,039,748	137.4	73,360	6.7	2,411	20747.6	21,115,519
はぎ	1558.1	428,316	693.0	133,147	2035.7	64,218	4286.7	625,681
鰹	26004.3	8,937,635	19632.7	2,041,196	1981.9	347,169	47618.9	11,326,000
あいご	0.0	0	0.0	0	1.9	168	1.9	168
むろ	264.4	29,813	54.8	5,645	3.8	607	323.0	36,064
目近	8729.7	292,603	5650.8	250,102	3189.2	179,782	17569.7	722,487
アオリイカ	1547.8	1,197,690	226.0	237,781	48.4	67,549	1822.3	1,503,019
赤いか	432.1	407,857	620.0	775,906	46.9	87,378	1099.0	1,271,141
するめいか	47956.0	9,927,324	1205.3	364,753	1.7	1,126	49163.0	10,293,204
むつ	2039.9	1,359,939	1648.3	509,538	91.0	40,315	3779.1	1,909,793
飛魚	1811.5	352,293	1968.6	221,277	11.7	3,057	3791.8	576,627
鯛	1251.8	1,317,966	218.4	190,291	26.3	31,318	1496.5	1,539,574
すずき	133.5	39,270	3.5	663	0.0	0	137.0	39,932
かます	61.9	20,557	9550.6	1,066,707	575.5	106,368	10188.0	1,193,632
ヒラマサ	212.9	143,735	21.2	24,600	7.0	10,765	241.1	179,101
平目	434.9	683,266	93.9	175,791	31.1	66,409	559.9	925,466
石鯛	330.4	266,768	2400.4	637,949	366.4	205,292	3097.2	1,110,009
かんばち	58.7	45,932	208.0	193,600	75.8	65,573	342.5	305,105
鯖	78141.9	5,446,435	10094.4	835,678	10.4	1,500	88246.7	6,283,614
やがら	93.2	14,111	14.2	3,579	0.1	10	107.5	17,701
太刀魚	3173.1	890,172	690.5	338,247	60.4	15,569	3923.9	1,243,988
よらり	162.8	14,038	38.9	6,115	0.0	0	201.7	20,153
鮫	8.0	18,767	3.7	4,433	0.3	333	12.0	23,533
ぎへ	0.7	833	0.0	0	0.0	0	0.7	833
だす	0.0	0	0.0	0	0.3	33	0.3	33
シマアジ	4.0	4,854	12.0	26,955	18.4	28,356	34.4	60,164
いさき	1381.2	594,388	534.6	355,180	9.2	9,035	1925.0	958,604
しいら	4922.1	241,849	3410.7	273,562	120.7	16,194	8453.4	531,605
鰯	15051.7	829,399	16873.7	541,658	81.7	27,863	32007.1	1,398,921
鰯	1040.3	1,939,136	1007.4	1,803,245	399.1	686,486	2446.8	4,428,867
目市	1.9	2,204	49.3	122,997	99.0	283,235	150.1	408,436
クエ	41.7	444,067	5.9	43,565	9.7	61,608	57.3	549,240
鯉	1537.0	737,647	831.1	690,735	122.6	108,233	2490.7	1,536,615
秋刀魚	526.4	108,838	0.0	0	0.0	0	526.4	108,838
カジキ	5.2	1,033	174.4	70,455	6.2	2,270	185.8	73,759
めじな	2524.4	452,868	60.1	8,033	11.9	2,690	2596.3	463,590
鯨	241.0	670,523	0.0	0	0.0	0	241.0	670,523
雑物	1858.2	306,880	1034.3	159,376	98.4	38,707	2990.9	504,963
計	406809.0	122,276,357	84309.6	13,800,954	9972.0	2,913,674	501090.6	138,990,984

A漁場 平均単価300円/kg B漁場 平均単価163円/kg C漁場 平均単価292円/kg 全漁場平均単価 277円/kg

太地町地域プロジェクトの概要

地域の課題

安全性・作業性

- ・ 現状の船団構成・漁具により乗組員による危険な潜水作業を余儀なくされている。
- ・ 船の漁撈機器の能力不足、甲板スペースの狭さにより作業性に優れた漁具の導入が出来ない。
- ・ 網交換作業の効率が悪く、時間と負担が大きいため交換頻度が少ない。
- ・ 現在の漁場設置位置では魚群の遮断効率が悪い。
- ・ 船齢の嵩んだ5隻の船団では修繕費・燃油費の負担が大きい。

漁場効率の悪さ

品質管理・魚価低迷

- ・ 漁獲物の品質低下による単価下落。
- ・ 大量漁獲時の単価下落。
- ・ 販路の固定化による単価の頭打ち。

後継者

- ・ 後継者不足
- ・ 網保守技術の継承不足。

地域状況

- ・ 地域人口の減少。
- ・ 第一次産業の衰退。
- ・ 太地定置網の認知度の低さ。

課題を克服するための取り組み

A. 改革型漁船の導入

潜水作業の廃止に繋がり、安全性が向上。
修繕費・燃油費の削減。

B. 合理的な漁具の導入

C. 網分割箇所の変更

作業性の向上、作業時間の短縮、作業負担の軽減、導入コスト削減。

D. 網交換サイクルの変更

漁獲損失や事故のリスクを回避し、安定した漁獲と管理体制へ移行。

E. 網設置の効率化

これまで漁獲出来なかった沖通りの魚を網内へ誘導。漁獲量の向上。

F. 肘金庫の増設

品質向上。
単価保持。

I. 販路の拡大

地域内での流通。
単価向上。
太地町のPR。

H. 新規就業者の安定的な確保対策

若い人材確保。
網守技術の向上。
修繕費の削減。

G. 資源管理

幼魚の資源保護。

J. イベントによる交流人口の増加

地域イベントや太地町で策定している「守り浦湾鯨の海構想」への継続参加。

改革後の地域の目標

- 安全性が確保され、漁場管理の行き届いた定置網操業。
- 効率的に漁船・漁具を運用し、安定した漁獲が見込める定置網運営。
- 後継者の確保と網守り・漁撈技術の継承がなされ、自立した定置網管理。
- 販路が拡大するとともに、漁獲物を適正価格で販売することが可能となる。
- 地域住民・漁業関係者が一体となり、地域の活性化を目指す。

今事業で、取り組みを履行し成果が実証されれば、定置網漁業の一つのモデルとなり地域のみならず、広く波及することが見込める。

